

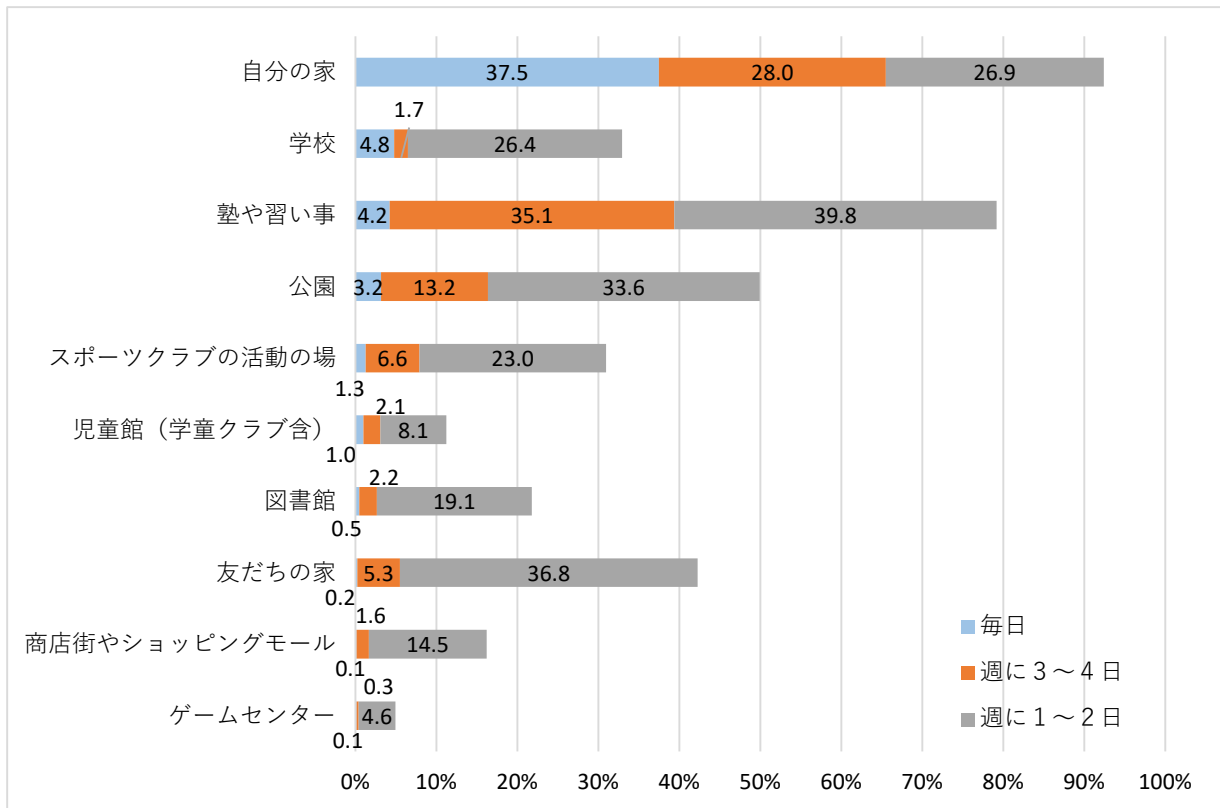
第5部 子どもの居場所

1. 放課後・休日の過ごし方

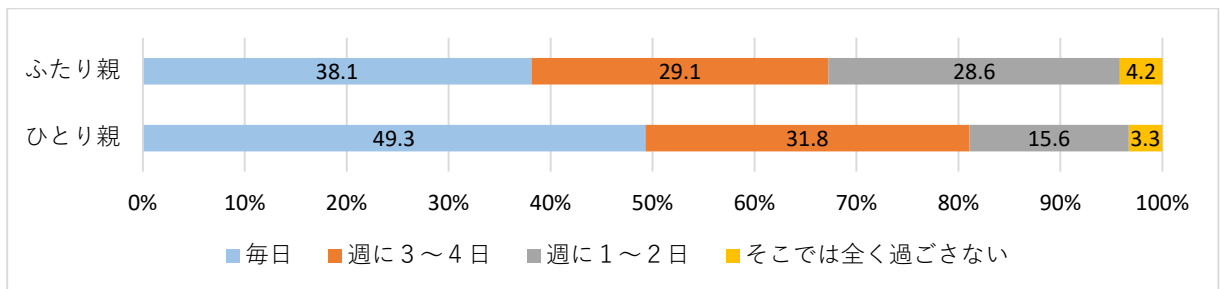
(1) 平日の放課後に過ごす場所

調布市の小学5年生は平日の放課後を「自分の家」で過ごすことが多く、37.5%は「毎日」、28.0%は「週に3～4日」自宅で過ごしている。「毎日」放課後を過ごすことが次に多いのは「学校」4.8%、「塾や習い事」4.2%である。子どもたちが放課後に最もよく過ごす「自分の家」を世帯タイプ別にみると有意差はないものの、ひとり親世帯の小学5年生の約5割が「毎日」自分の家で過ごしていることが分かる。

図表 5-1-1 平日の放課後に過ごす場所（小学5年生）



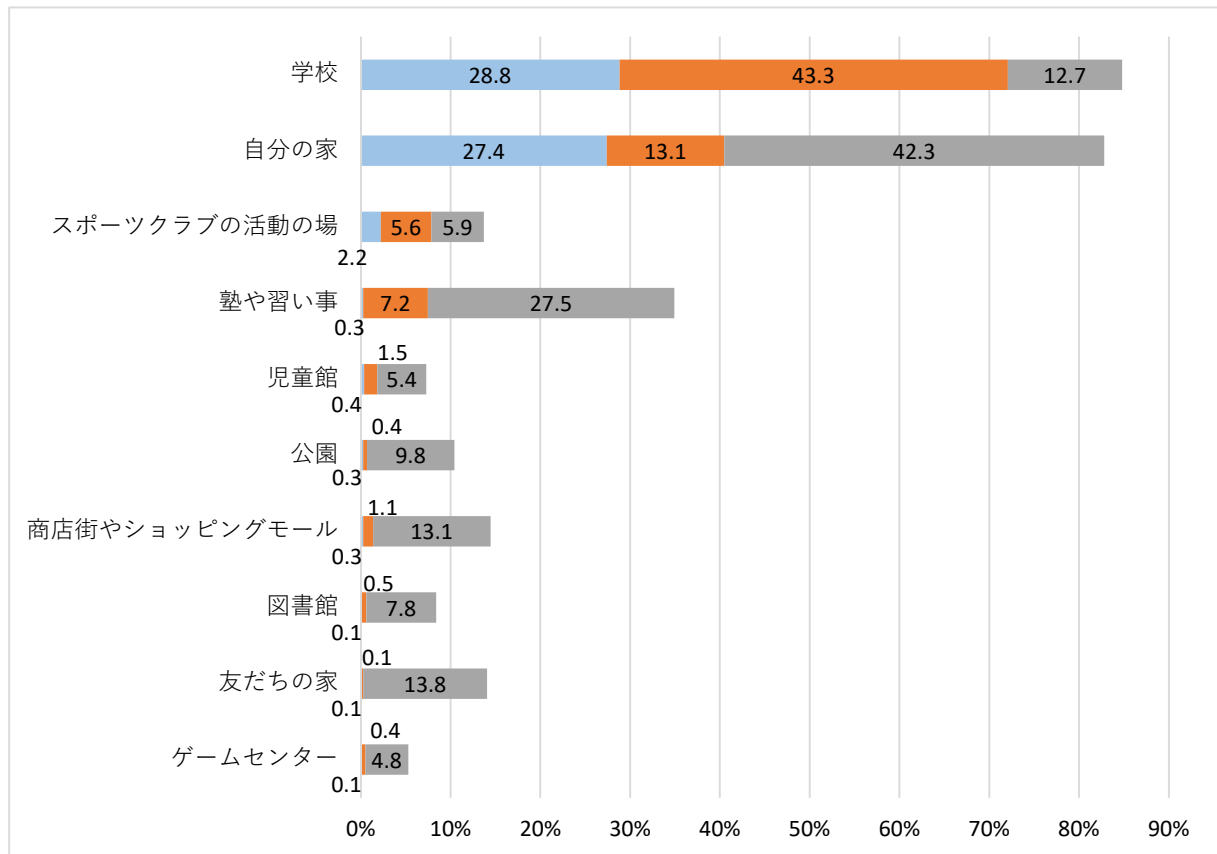
図表 5-1-2 平日の放課後に自分の家で過ごす頻度（小学5年生）：世帯タイプ別(X)



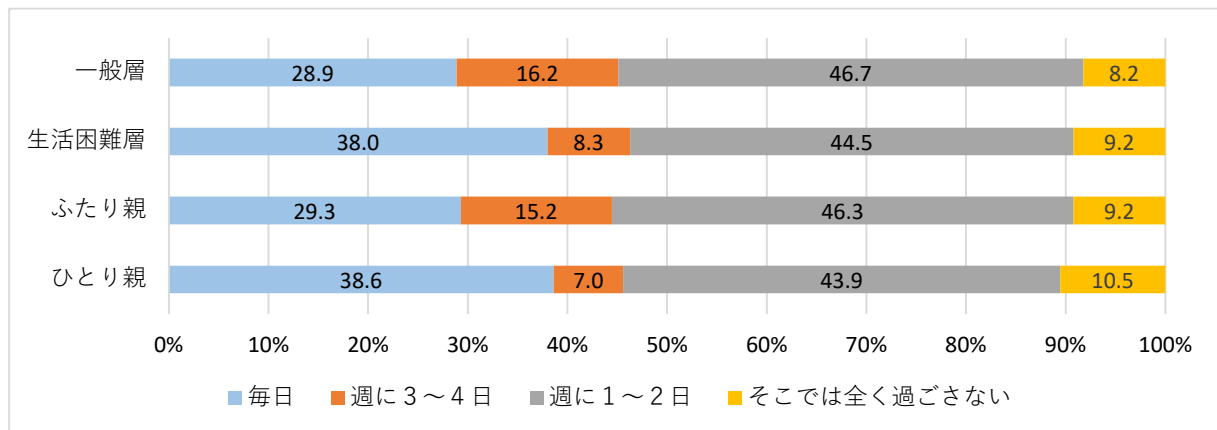
*無回答を除いた割合

調布市の中学2年生は平日の放課後を「学校」で過ごすことが多く、28.8%は「毎日」、43.3%は「週に3~4日」学校で過ごしている。次に多いのは「自分の家」で、27.4%は「毎日」、13.1%は「週に3~4日」放課後を自宅で過ごしている。学校で過ごす頻度は生活困難度別に差はない一方で、自宅で過ごす頻度は生活困難度別に差があり、生活困難層は38.0%が「毎日」自分の家で過ごすとしており、一般層よりも約9ポイント多い。また、世帯タイプ別に有意差は認められないものの、ひとり親世帯の中学2年生の38.6%は「毎日」自分の家で過ごしている。

図表 5-1-3 平日の放課後に過ごす場所（中学2年生）



図表 5-1-4 放課後に自分の家で過ごす頻度（中学2年生）：生活困難度別(*)、世帯タイプ別(X)

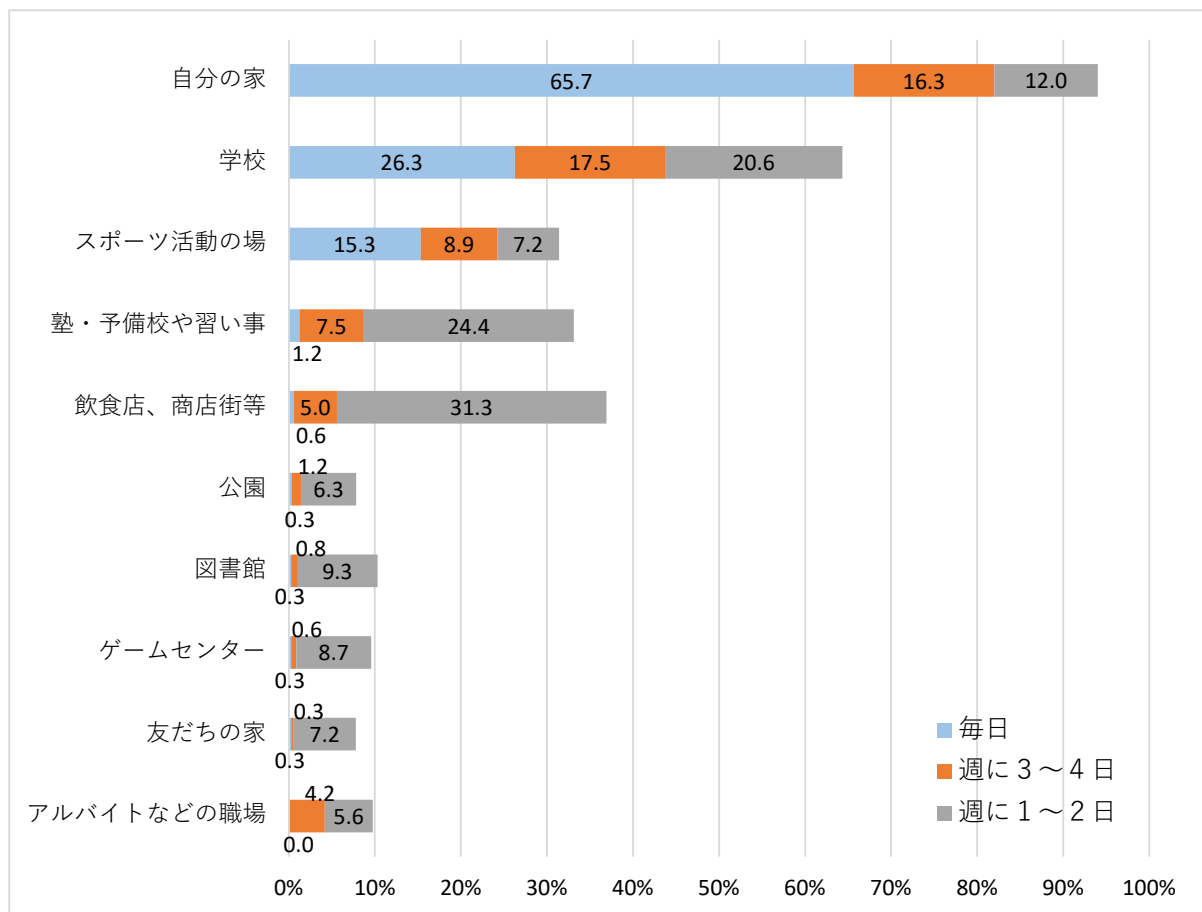


*無回答を除いた割合

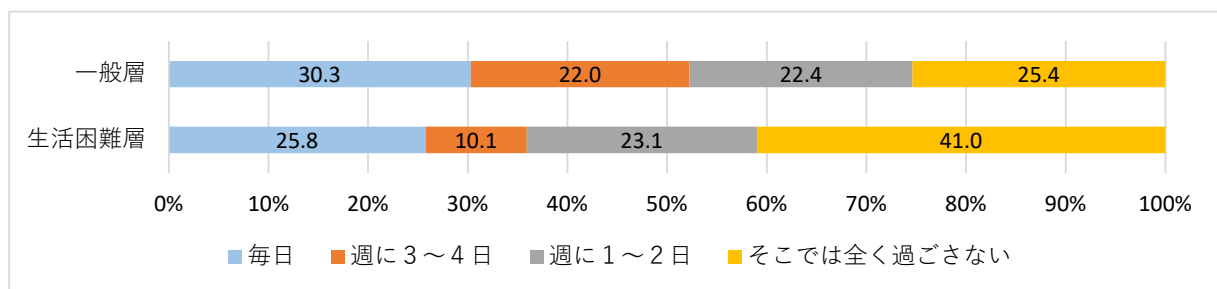
16-17 歳になると、放課後を学校で過ごすよりも自宅で過ごす頻度の方が多くなる。平日の放課後を「自分の家」で過ごす割合が最も多く、65.7%は「毎日」、16.3%は「週に3～4日」自宅で過ごしている。次に多いのが「学校」で、26.3%は「毎日」、17.5%は「週に3～4日」学校で放課後を過ごしている。自宅で過ごす頻度は生活困難度別に有意な差は見られないが、学校で過ごす頻度は生活困難度別に有意な差があり、生活困難層は一般層よりも学校で過ごす頻度が少ない。

16-17 歳になると、「スポーツ活動の場」で過ごす割合が中学2年生よりも増える（「週に1日以上」31.4%）。また、金銭を持ち歩くためか、「飲食店・商店街等」で過ごす割合も増える（「週に1日以上」36.9%）。

図表 5-1-5 平日の放課後に過ごす場所（16-17 歳）



図表 5-1-6 平日の放課後に学校で過ごす場所（16-17 歳）：生活困難度別(***)

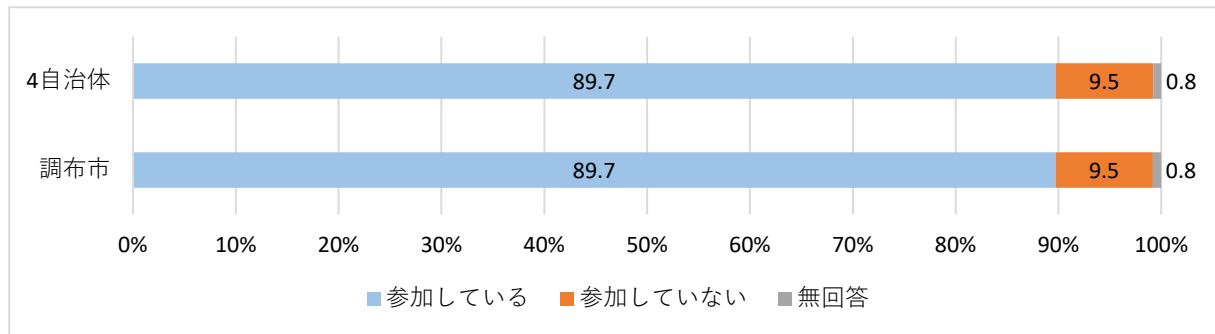


* 無回答を除いた割合

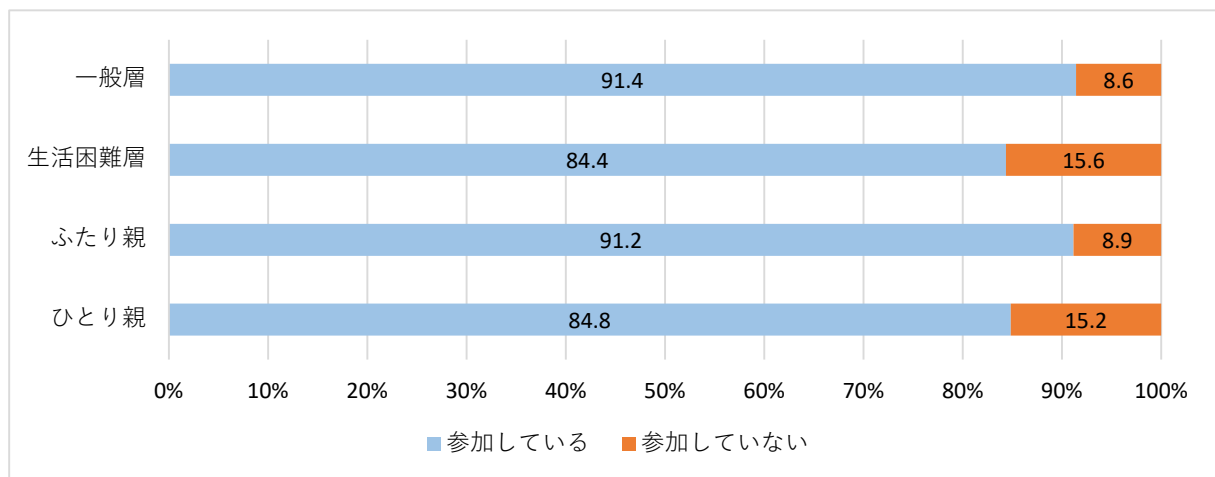
(2) クラブ活動

放課後を学校で過ごす中学2年生の多くはクラブ活動をしていると思われるが、調布市の中学2年生のクラブ参加率は約9割で、4自治体全体と同じである。しかし、生活困難層、ひとり親世帯の中学2年生のクラブ参加率は約85%で、一般層、ふたり親世帯に比べて低い。参加しない理由は、「入りたいクラブがないから」「塾や習い事が忙しいから」が多い。

図表 5-1-7 クラブ活動への参加状況（中学2年生）：4自治体・調布市

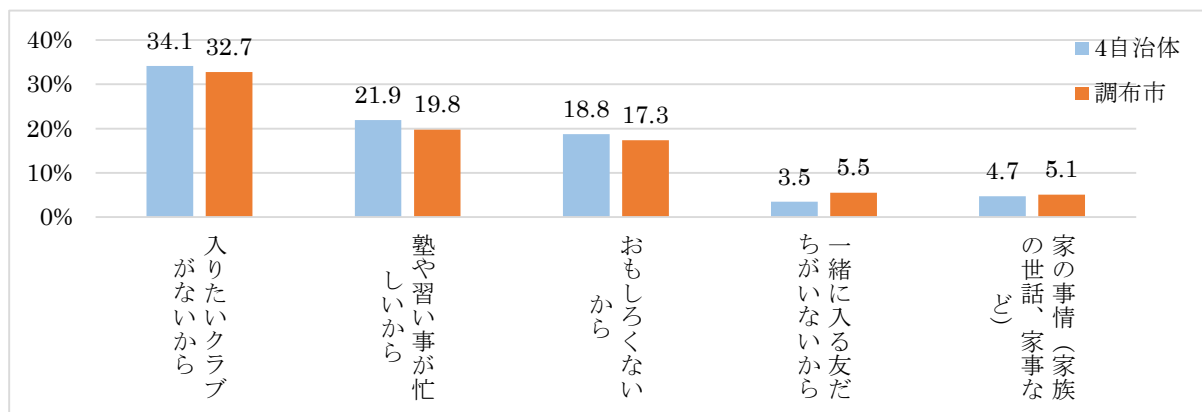


図表 5-1-8 クラブ活動への参加状況（中学2年生）：生活困難度別(**)、世帯タイプ別(*)



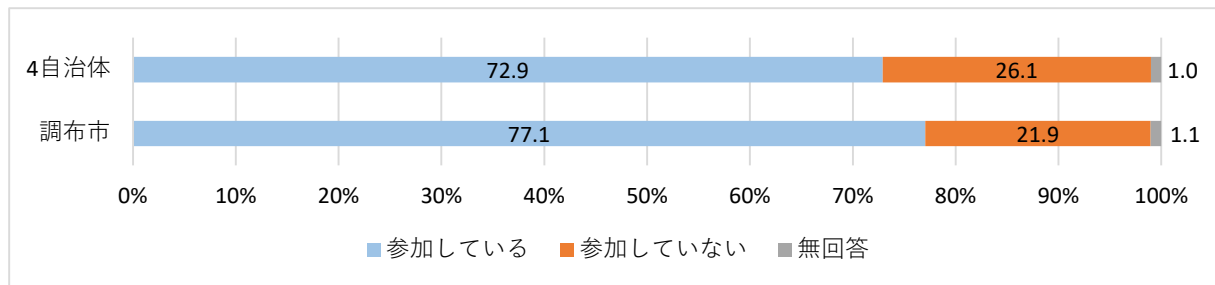
* 無回答を除いた割合

図表 5-1-9 クラブ活動に参加しない理由（中学2年生）：4自治体・調布市(n=75)

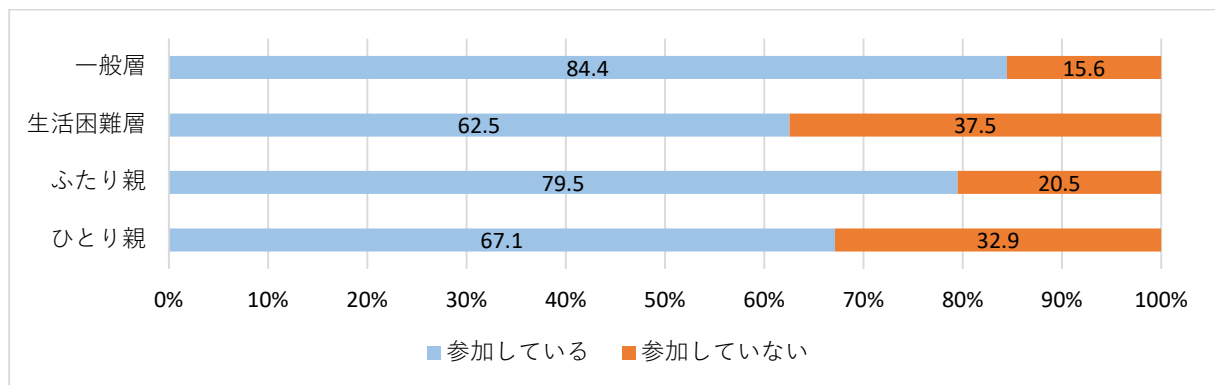


16-17歳で「学校や職場・地域のクラブやスポーツ活動」に参加している割合は、77.1%である。しかし、生活困難度別、世帯タイプ別に参加状況は異なり、生活困難層の16-17歳の参加は62.5%で、一般層より約22ポイントも少ない。また、ひとり親世帯の16-17歳の参加は67.1%で、ふたり親世帯よりも約12ポイント少ない。参加しない主な理由は「入りたいクラブがないから」が65.2%と最も多い。

図表 5-1-10 学校や職場・地域のクラブやスポーツ活動への参加状況（16-17歳）：
4自治体・調布市

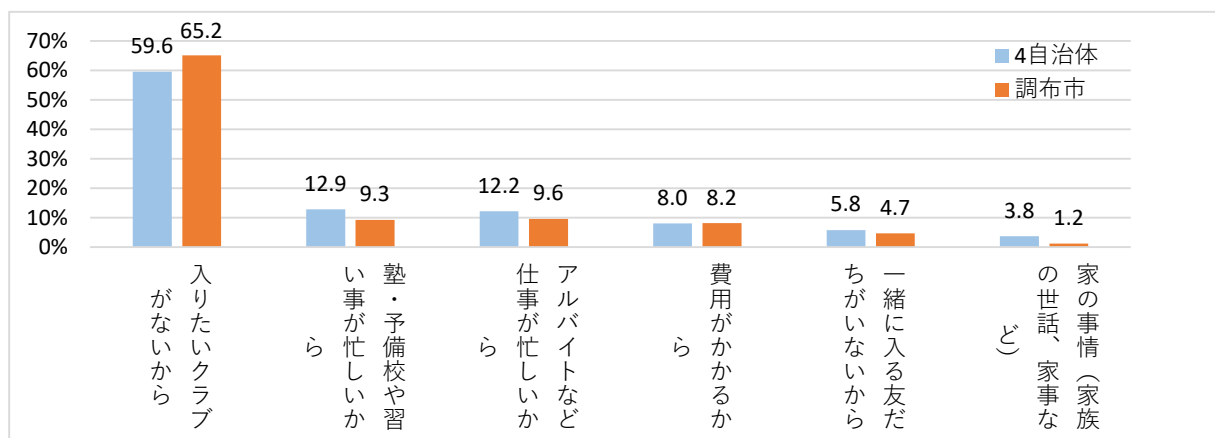


図表 5-1-11 学校や職場・地域のクラブやスポーツ活動への参加状況（16-17歳）：
生活困難度別(***)、世帯タイプ別(***)



*無回答を除いた割合

図表 5-1-12 学校や職場・地域のクラブやスポーツ活動に参加しない理由（16-17歳）：
4自治体・調布市(n=152)

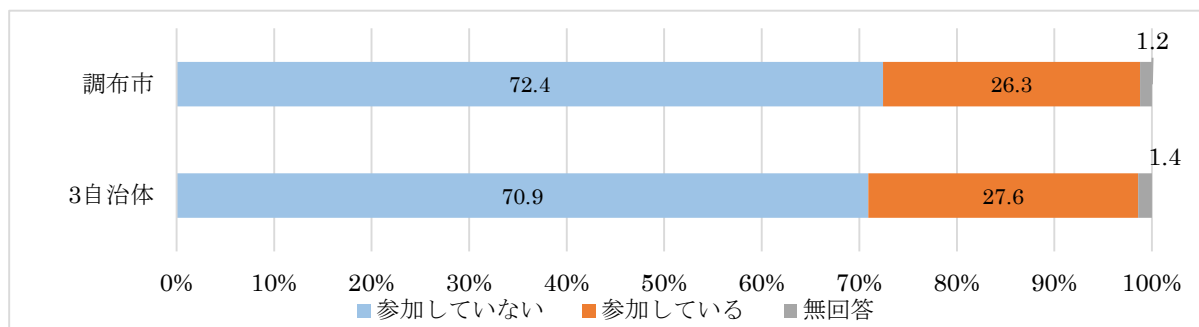


(3) 放課後子供教室「ユーフォー」

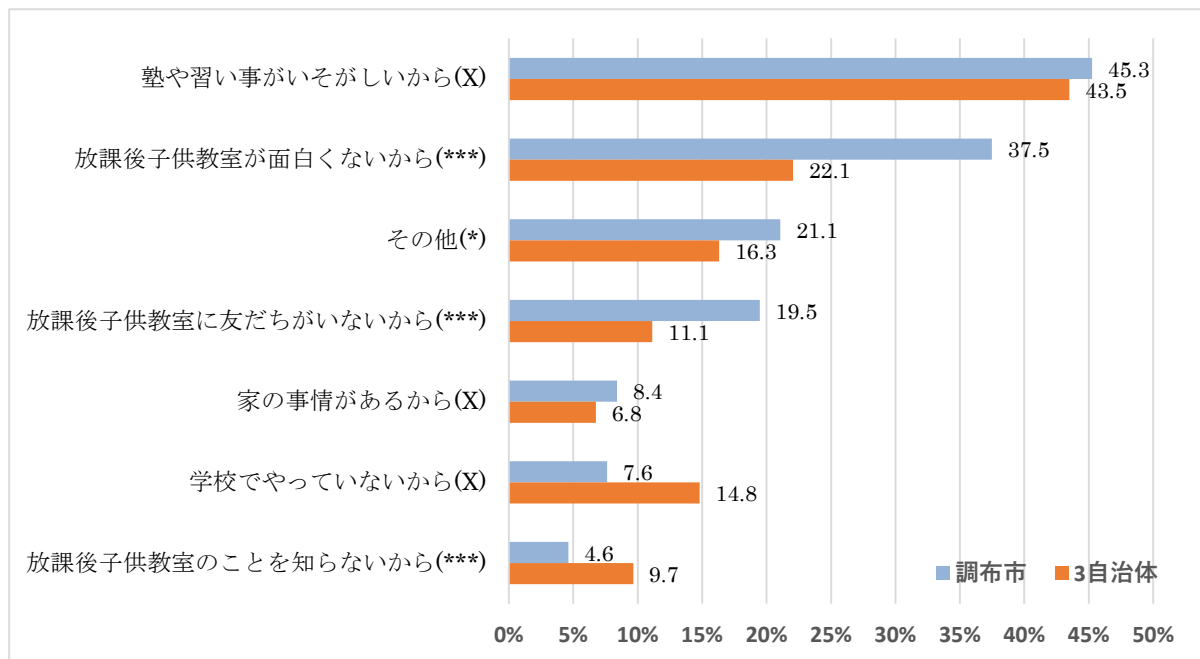
平日の放課後および休日の過ごし方に関して、調布市の小学5年生自身に、放課後子供教室「ユーフォー」に参加しているかどうかきいたところ、26.3%が「参加している」と答えた。調布市以外の3自治体の加重平均との間に有意な差はなかった。また、生活困難度別、世帯タイプ別にみても有意な差はなかった。さらに、母親の就労状況（雇用形態、夜・深夜勤の有無、週あたり労働時間）によっても有意な差は確認されなかった。

「ユーフォー」に参加しない理由を聞いたところ、多い順に、「塾や習い事が忙しいから」45.3%、「『ユーフォー』がおもしろくないから」37.5%、「『ユーフォー』に友だちがいないから」19.5%、「家の事情（家族の世話、家事など）があるから」8.4%、「学校でやっていないから」7.6%、「『ユーフォー』のことを知らないから」4.6%、「その他」21.1%という結果となった。これらを調布市以外の3自治体の加重平均と比較すると、「『ユーフォー』がおもしろくないから」「『ユーフォー』に友だちがいないから」「その他」の割合は有意に高く、「学校でやってないから」「『ユーフォー』のことを知らないから」の割合は有意に低かった。特に「『ユーフォー』がおもしろくないから」の割合は、3自治体の加重平均よりも約15ポイント高かった。また、「その他」の自由記述欄に記入があったものは102ケースである。同様の回答をまとめたところ「家に母がいつもいるから」「1人で留守番できる年齢だから」「1人で家にいる方が楽しいから」というように家で過ごすとするもの（31ケース）、「友だちと遊ぶから」といった他の場所で友だちと過ごすとするもの（30ケース）、「ユーフォーで遊ぶより別の場所の方が好きなことができるから」といった制限されずに自由に遊びたいとするもの（11ケース）が目立った。なお、「家で友だちと遊ぶ」といったように重複する回答は、それぞれでカウントしている。

図表 5-1-13 放課後子供教室「ユーフォー」の参加率 (X) : 調布市 3自治体



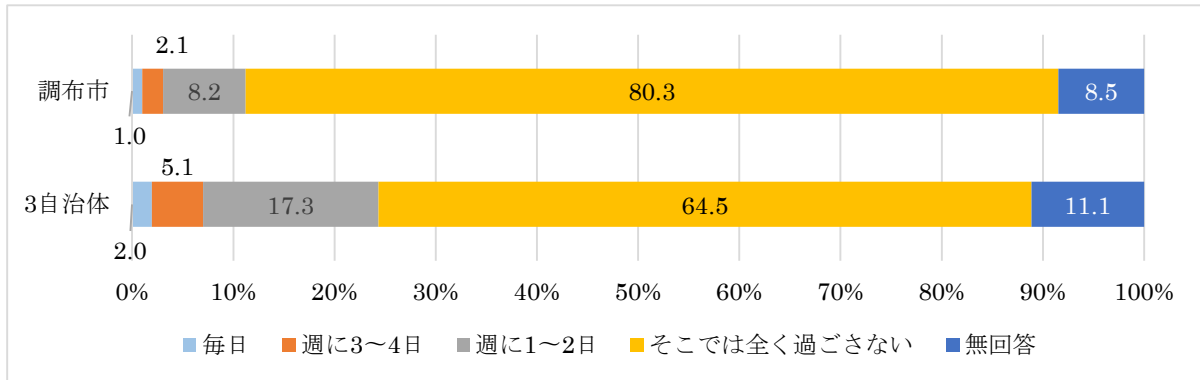
図表 5-1-14 放課後子供教室「ユーフォー」に参加しない理由：
調布市、3自治体



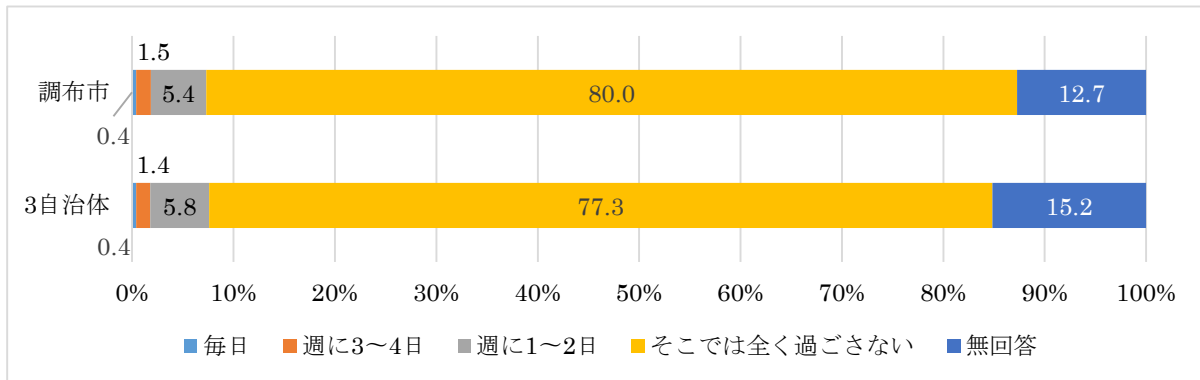
(4) 児童館・青少年ステーションCAPS

平日の放課後に児童館（中学生はCAPS含む）を利用する頻度について、小学5年生と中学2年生に、「毎日」「週に3～4日」「週に1～2日」「そこでは全く過ごさない」の4つの選択肢で聞いた。週1回以上、平日の放課後に児童館で過ごす割合（「毎日」「週に3～4日」「週に1～2日」の合計）を利用率とすると、小学5年生は11.3%、中学2年生は7.3%であった。調布市の小学5年生の利用率は調布市以外の3自治体の加重平均24.4%よりも有意に低く、調布市の小学5年生は、他の自治体に比べて児童館を利用しない傾向にあるといえる。中学2年生の児童館利用頻度（利用率）は、他の3自治体加重平均とほぼ同じである。

図表 5-1-15 平日放課後の児童館の利用頻度（小学5年生）（***）



図表 5-1-16 平日放課後の児童館（CAPS含む）の利用頻度（中学2年生）（X）



小学5年生の平日の放課後の児童館利用率を、生活困難度別、世帯タイプ別にみたところ、有意な差は確認されなかった。母親の就労状況（雇用形態、夜・深夜勤の有無、週あたり労働時間）によっても有意な差は確認されなかった。ただし、就労していない母親を除いて、子どもが平日の放課後に児童館を利用する層と利用しない層の週あたり平均労働時間を比較したところ、利用する層の方が有意に長かった。

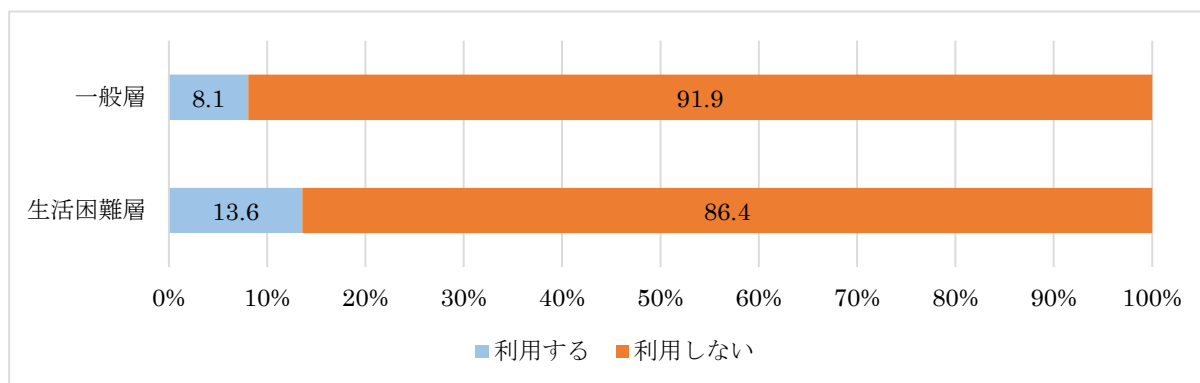
図表 5-1-17 児童館の利用状況と母親の平均労働時間（小学 5 年生）（*）

	有効ケース数	母親の週当たり平均労働時間
利用する	50	31.0
利用しない	432	27.1

*無回答ならびに専業主婦等の就労していない母親を除く

中学 2 年生の平日の放課後の児童館（CAPS 含む）利用率を、生活困難度別、世帯タイプ別にみたところ、生活困難度別でのみ有意な差が確認された。一般層の利用率が 8.1%であるのに対し、生活困難層の利用率は 13.6%であり、調布市の中学 2 年生は生活が困窮している層ほど児童館を利用する傾向にある。母親の就労状況（雇用形態、夜勤の有無、労働時間）については有意な差は確認されなかった。

図表 5-1-18 平日放課後の児童館の利用率（中学 2 年生）：生活困難度別（*）



*無回答を除いた割合

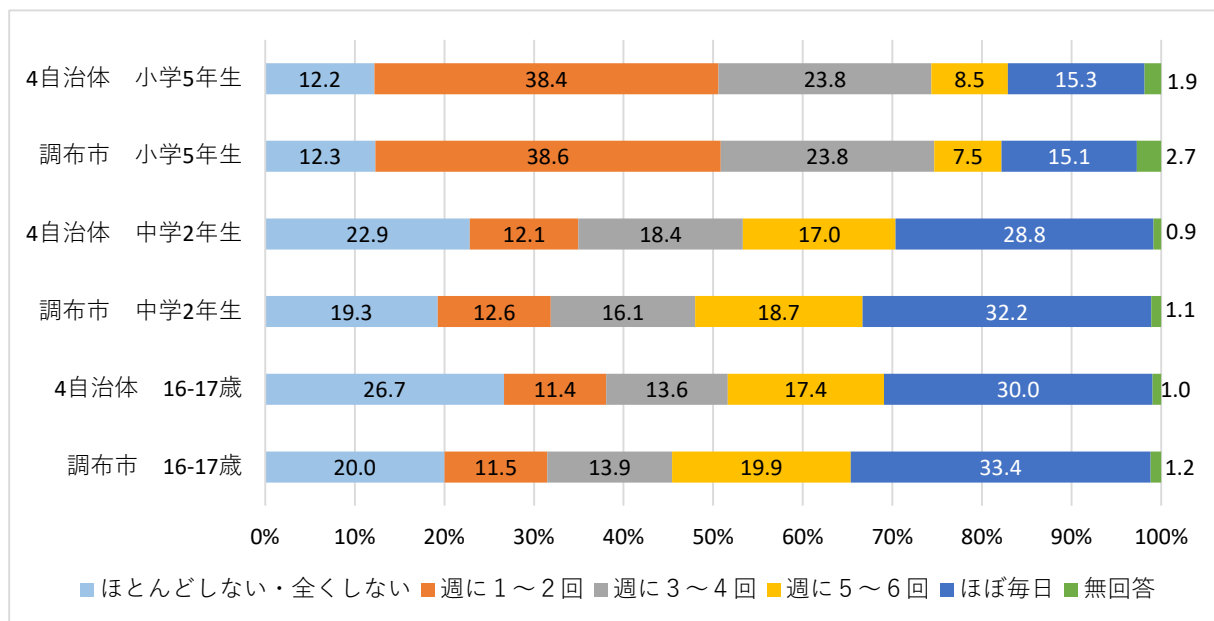
2. 運動・読書・家事負担・家族の世話

(1) 運動

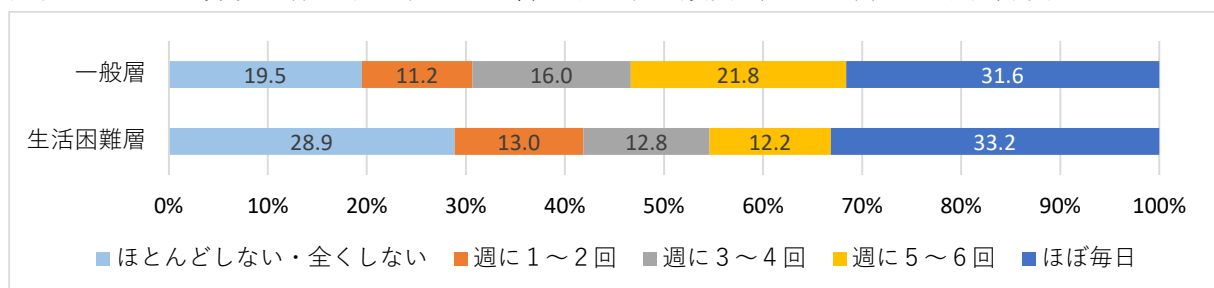
30分以上身体を動かす遊びや習い事をどのくらいの頻度で行っているか聞いた。調布市の小学5年生の15.1%は「ほぼ毎日」運動している一方、12.3%は「ほとんど・全くしない」としており、4自治体加重平均もほぼ同様である。中学2年生になると、「ほぼ毎日」「週に5～6回」運動する子どもが大幅に増える一方で、「ほとんど・全くしない」子どもの割合も増える。調布市の中学2年生、16-17歳は、週に5回以上（「ほぼ毎日」「週に5～6回」）運動する割合が50.9%、53.3%である一方で、「ほとんど・全く」運動をしない割合は約2割である。これに対し、中学2年生、16-17歳の4自治体加重平均は、週に5回以上が45.8%、47.4%、「ほとんど・全くしない」は22.9%、26.7%である。

生活困難度別、世帯タイプ別にみたところ、世帯タイプ別にはどの年齢層でも有意な差はみられなかった。生活困難度別には、小学5年生、中学2年生では有意な差は確認されなかったが、16-17歳の生活困難層は28.9%が「ほとんど・全く」運動をしないと答えており、一般層よりも約9ポイント多い。

図表 5-2-1 30分以上身体を動かす遊びや習い事をする頻度：4自治体・調布市



図表 5-2-2 30分以上体を動かす遊びや習い事をする頻度（16-17歳）：生活困難度別(*)



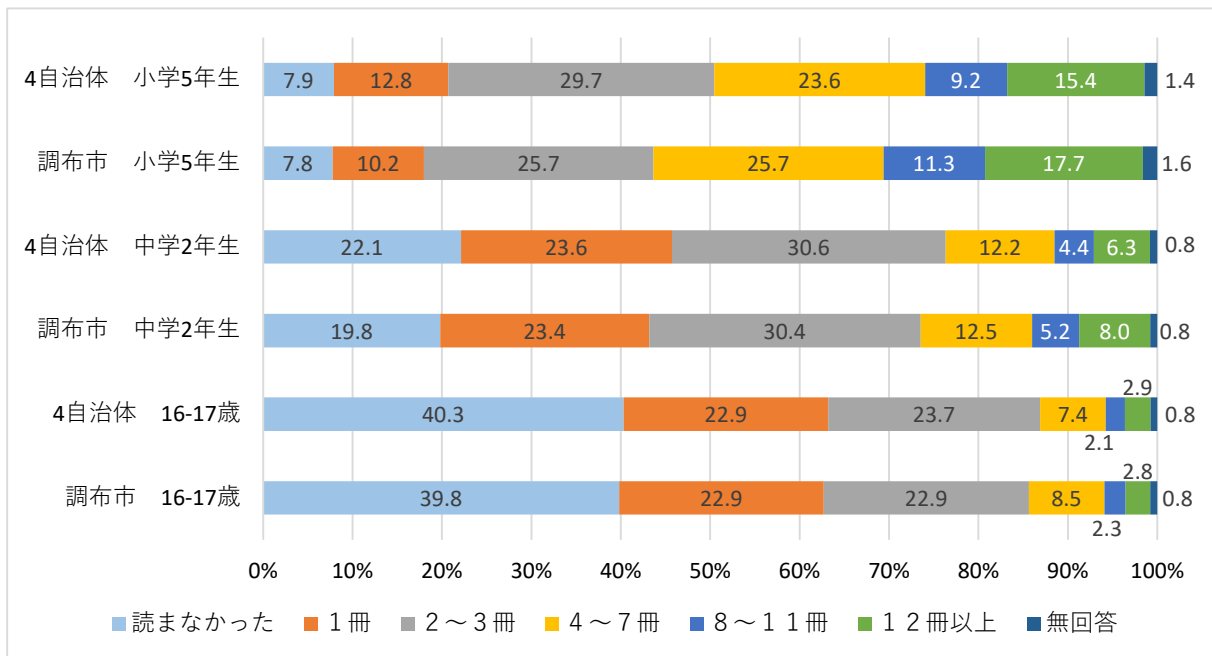
*無回答を除いた割合

(2) 読書

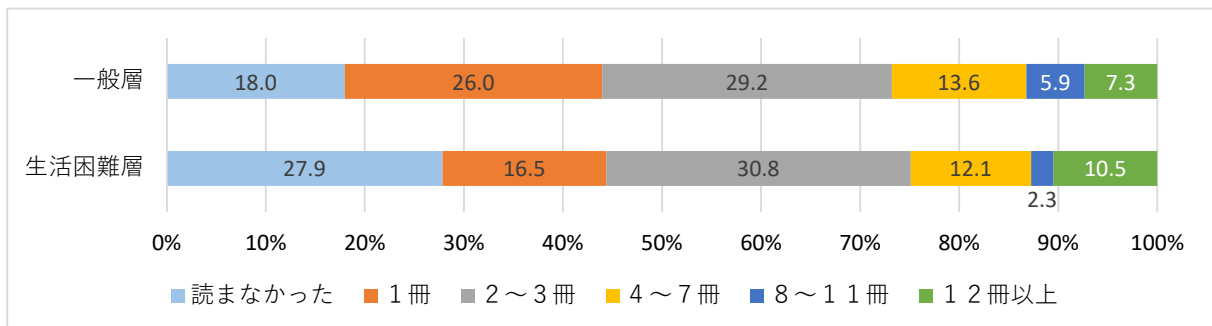
1か月に本を4冊以上読む子どもは、調布市の小学5年生で54.7%、中学2年生では25.7%、16-17歳では13.6%である。しかしながら、子どもの読書量は年齢が高くなるにつれて少なくなる傾向があり、1か月に1冊も「読まなかった」割合は調布市の小学5年生で7.8%であるが、中学2年生では19.8%、16-17歳では39.8%となる。中高生の読書の傾向は4自治体加重平均とほぼ同じである。

小学5年生では、読書量の傾向に、生活困難度、世帯タイプは影響していないが、中学2年生になると、生活困難層の子どもたちの27.9%が1冊も「読まなかった」としており、一般層よりも約10ポイント多い。また、16-17歳になると生活困難層とひとり親で読書離れが進み、「読まなかった」が約57%を占め、一般層、ふたり親との差は20~22ポイントにもなる。

図表 5-2-3 過去1か月に読んだ本の冊数：4自治体・調布市

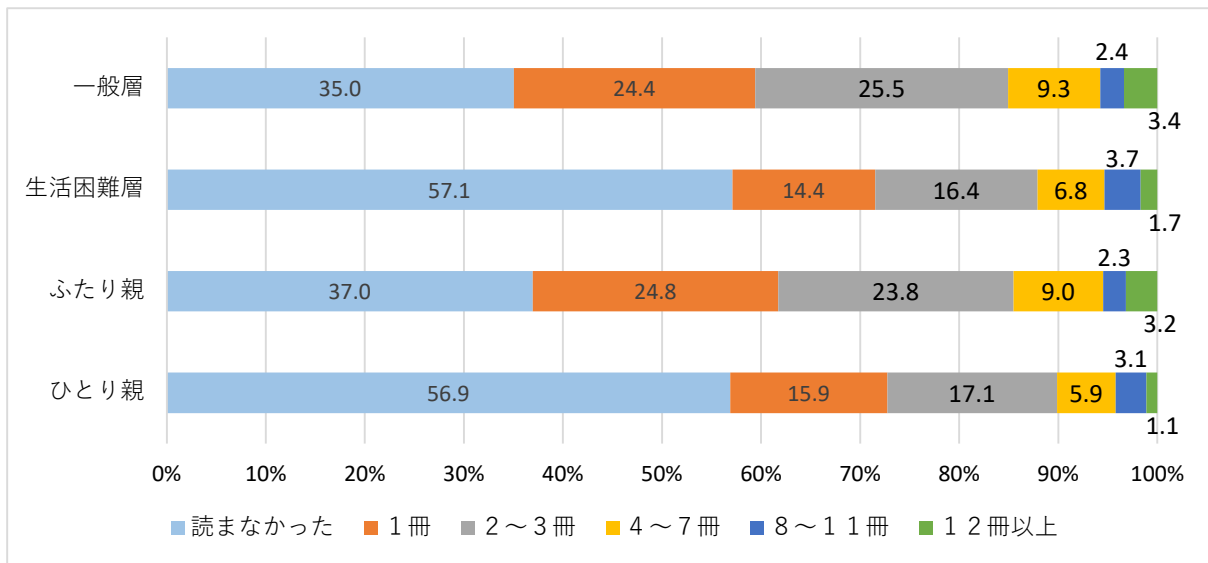


図表 5-2-4 過去1か月に読んだ本の冊数（中学2年生）：生活困難度別(**)



*無回答を除いた割合

図表 5-2-5 過去 1 か月に読んだ本の冊数（16-17 歳）：生活困難度別(***)、世帯タイプ別(**)



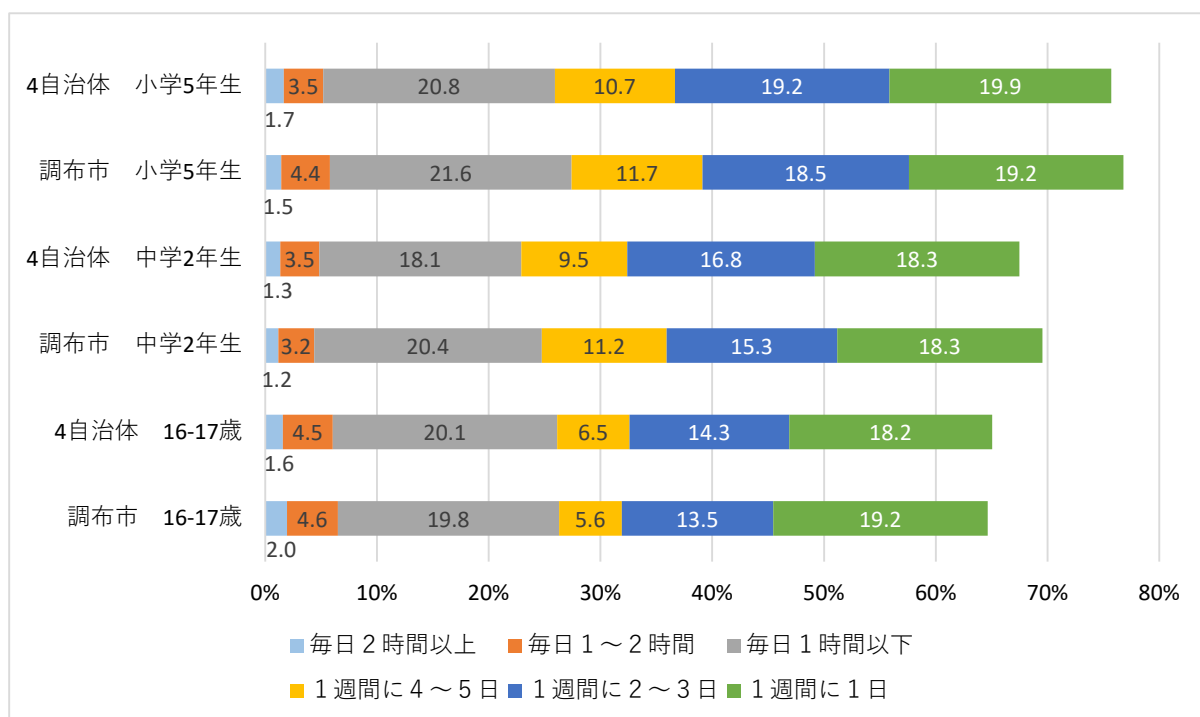
*無回答を除いた割合

(3) 家事負担・家族の世話

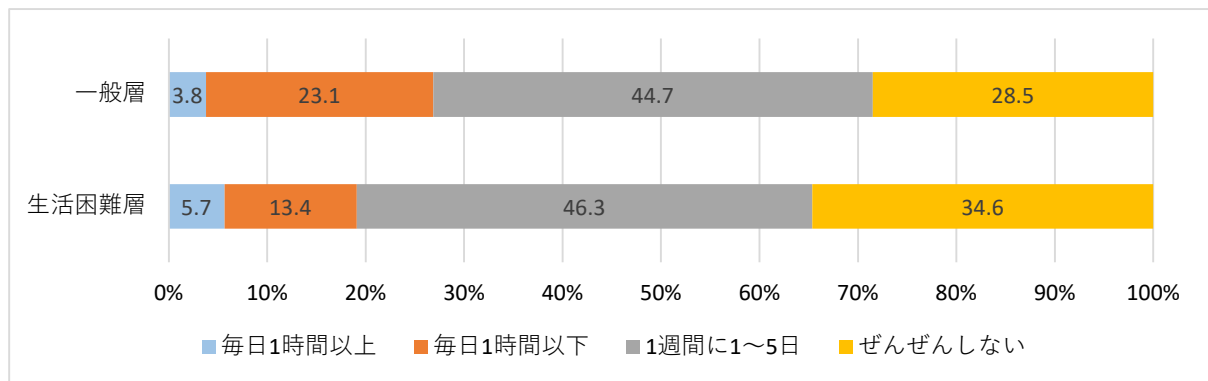
調布市の子どもたちはどの年齢層でも、1~2%が「毎日2時間以上」、3~5%が「毎日1~2時間」、19~22%が「毎日1時間以下」家事をしている。世帯タイプ別にはどの年齢層でも有意な差はみられず、生活困難度別では、中学2年生のみ有意な差がみられた。中学2年生の生活困難層の5.7%が「毎日1時間以上」家事をしており、一般層よりも約2ポイント多い一方で、「ぜんぜんしない」が34.6%と、一般層よりも約6ポイント多い。

家族の世話や介護についてみると、年齢が高くなるにつれて頻度が少なくなる傾向にある。調布市の小学5年生は10.1%が「毎日2時間以上」家族の世話をしている。「毎日1時間以上」家族の世話をする割合は、小学5年生で16.0%、中学2年生で5.0%、16-17歳で2.3%である。どの年齢層でも、生活困難度別、世帯タイプ別に有意な差はない。

図表 5-2-6 家事（洗濯、掃除、料理、片付けなど）をする頻度：4自治体・調布市

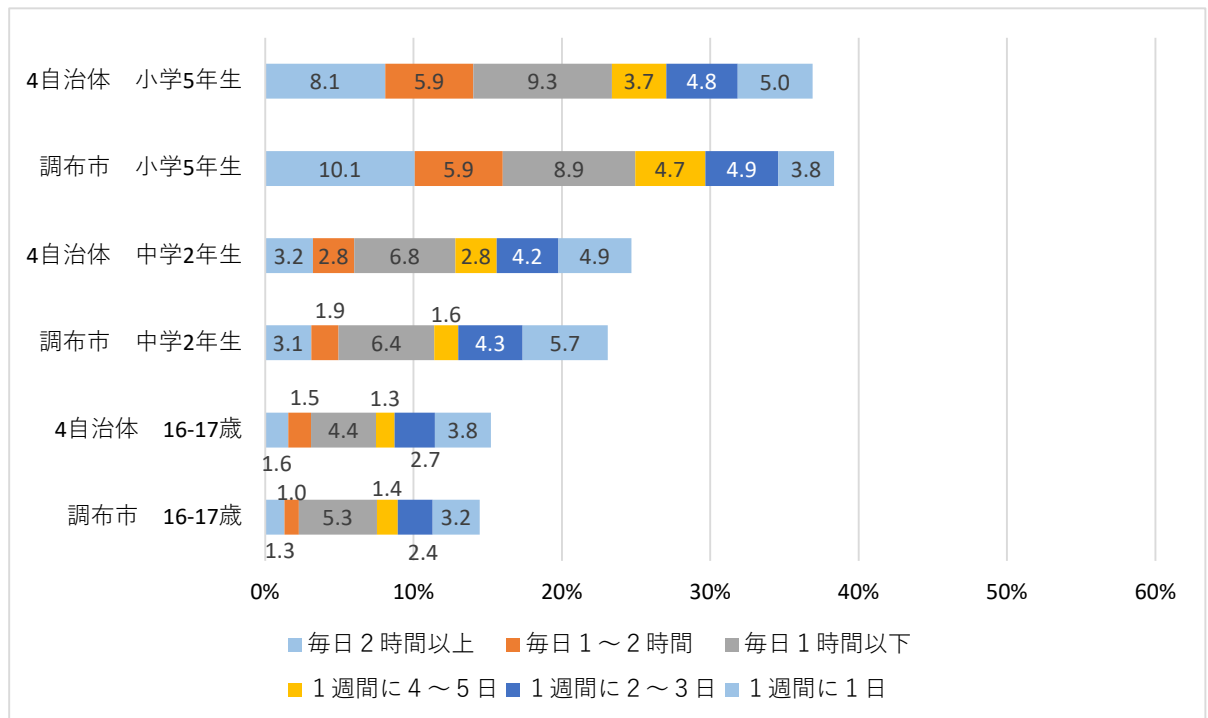


図表 5-2-7 家事（洗濯、掃除、料理、片付けなど）をする頻度（中学2年生）：生活困難度別(*)



*無回答を除いた割合

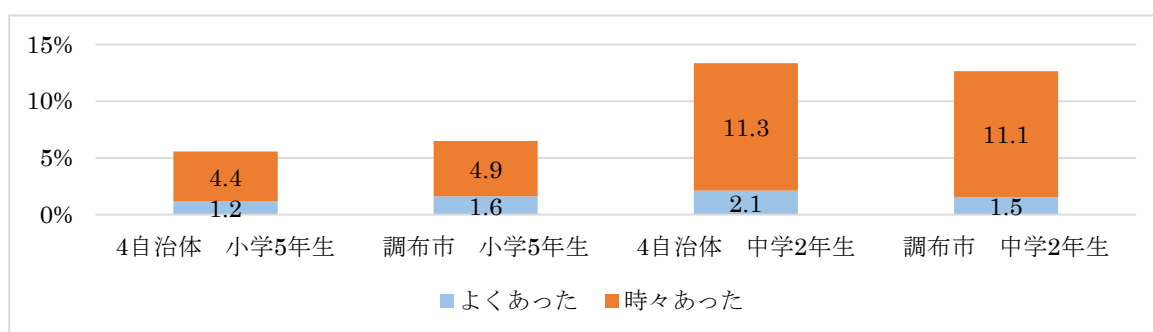
図表 5-2-8 家族の世話や介護をする頻度：4自治体・調布市



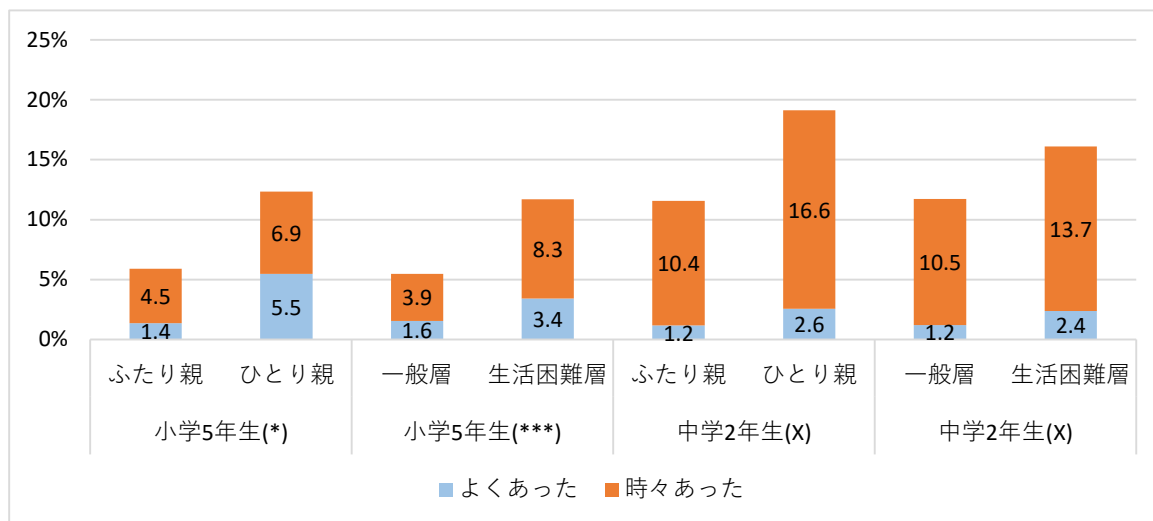
3. 夕方以降の留守番と母親の就労時間

「夜遅くまで子どもだけで過ごした」経験について小学5年生と中学2年生に聞いた。調布市の小学5年生は6.5%、中学2年生は12.6%があった（「よくあった」または「時々あった」と答えており、4自治体加重平均とほぼ同様の割合である。小学5年生では、世帯タイプ別にも、生活困難度別にも有意な差が確認され、ひとり親世帯の子どもは12.4%、生活困難層の子どもは11.7%が「夜遅くまで子どもだけで過ごした」ことがあり、それぞれ、ふたり親世帯、一般層の子どもたちよりも6~7ポイント多い。中学2年生では、世帯タイプ別、生活困難度別に有意な差はみられないものの、ひとり親世帯の子どもの19.2%、生活困難層の子どもの16.1%が「夜遅くまで子どもだけで過ごした」ことがある。

図表 5-3-1 夜遅くまで子どもだけで過ごした経験：4自治体・調布市



図表 5-3-2 夜遅くまで子どもだけで過ごした経験：世帯タイプ別、生活困難度別



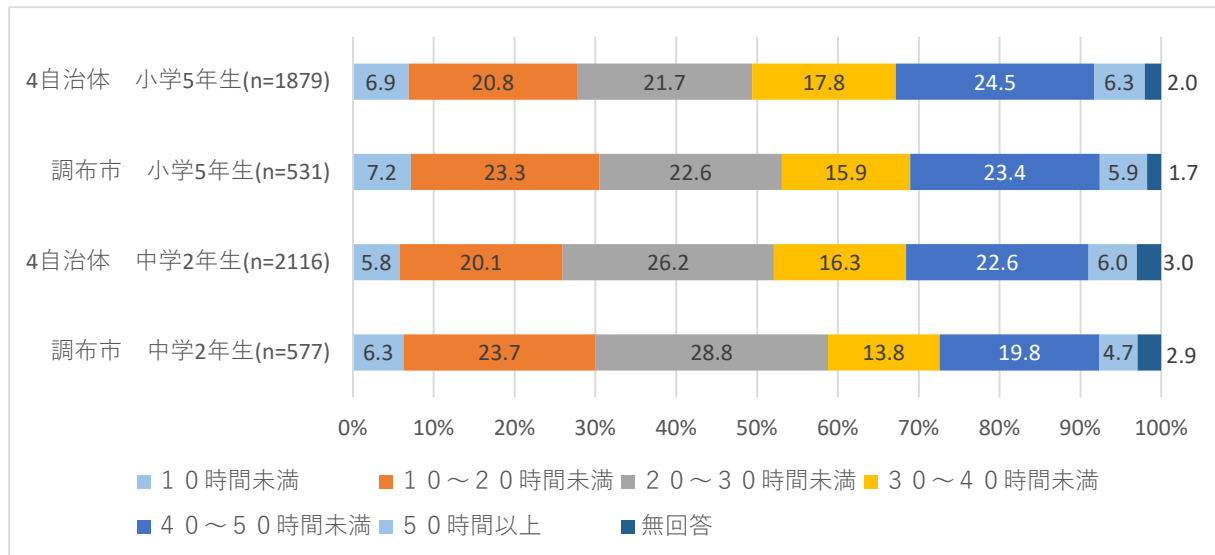
*無回答を除いた割合

子どもだけで夜遅くまで留守番しなければならない背景には、親の就労、特に母親の労働時間が関係していると推測される。そこで、就労している母親の週平均労働時間の分布を示したのが図表 5-3-3 である。小学5年生の夜遅くまでの留守番の経験は、母親の就労時間によって有意な差があり、母親の週平均労働時間が10時間を超えると、就労時間が長いほど夜遅くまでの留守番の経験割合が増える。母親の週平均労働時間が「40~50時間」で、夜遅くまでの留守番の経験は

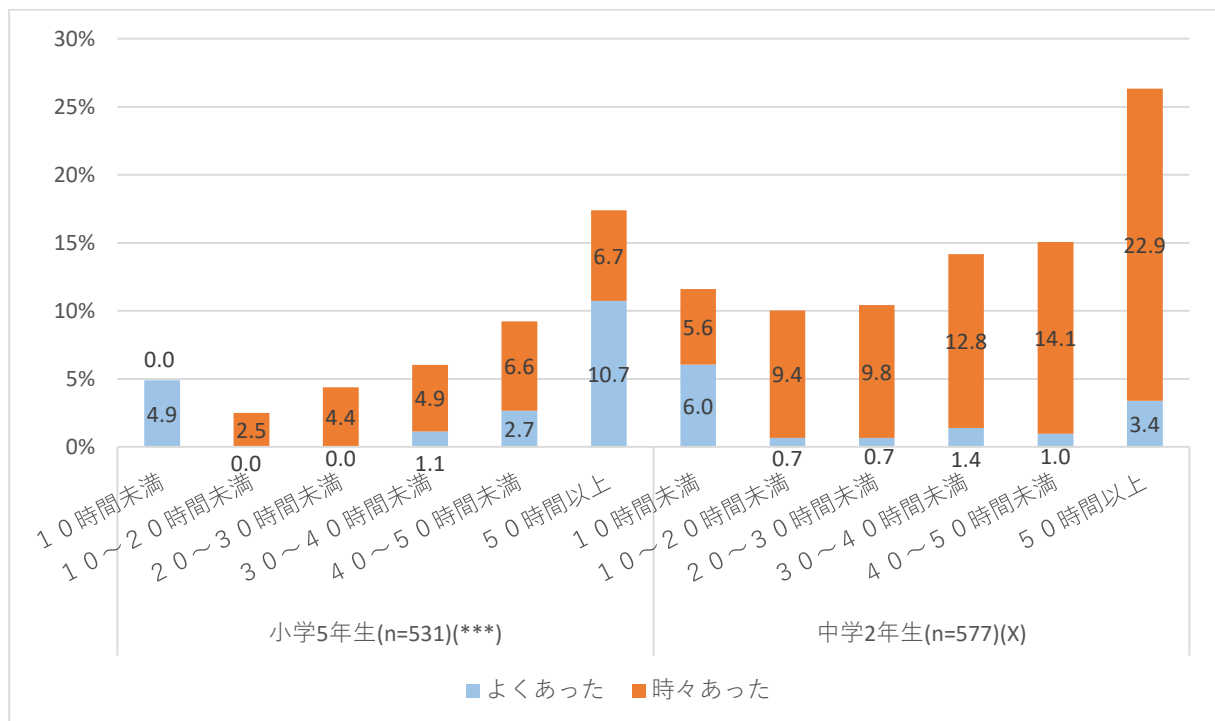
9.3%、「50 時間以上」になると、17.4%となり、「よくあった」が 10.7%と顕著に多い。

中学 2 年生の夜遅くまでの留守番の経験は、母親の労働時間によって有意な差は確認できないが、母親の週平均労働時間が「30～40 時間」「40～50 時間」では、14～15%が夜遅くまでの留守番を経験している。また「50 時間以上」になると、夜遅くまでの留守番経験は 26.3%にもなる。

図表 5-3-3 母親の就労時間（週平均）：4 自治体・調布市



図表 5-3-4 夜遅くまで子どもだけで過ごした経験：母親の就労時間別



* 無回答を除いた割合

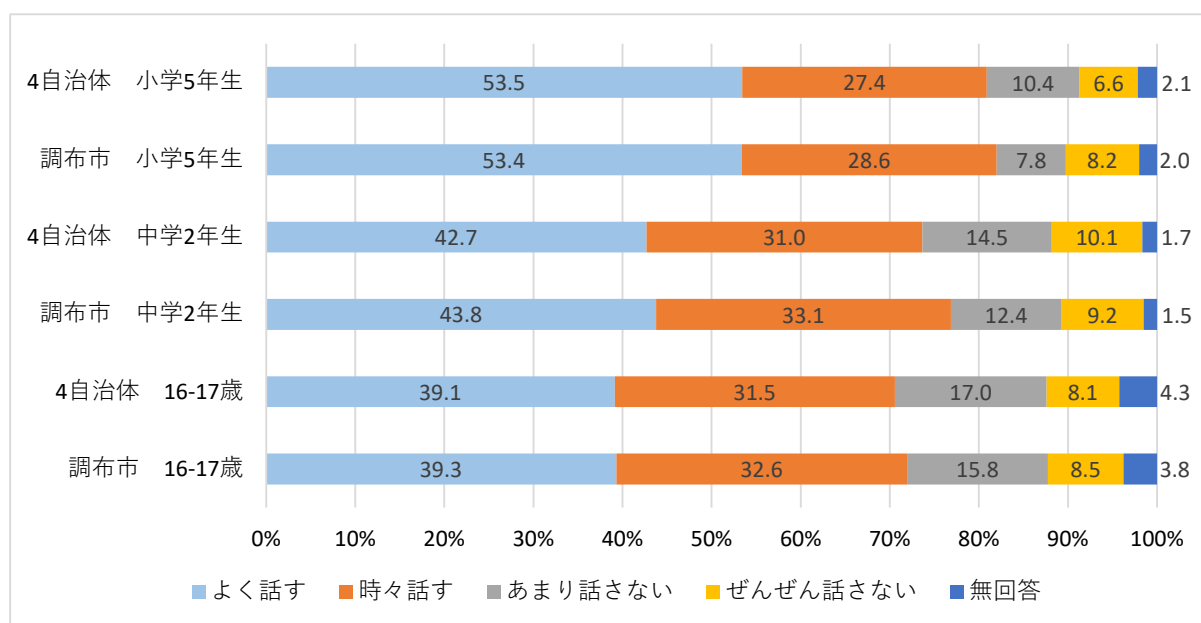
4. 親や友だちとの会話の頻度・孤立感

(1) 親との会話の頻度

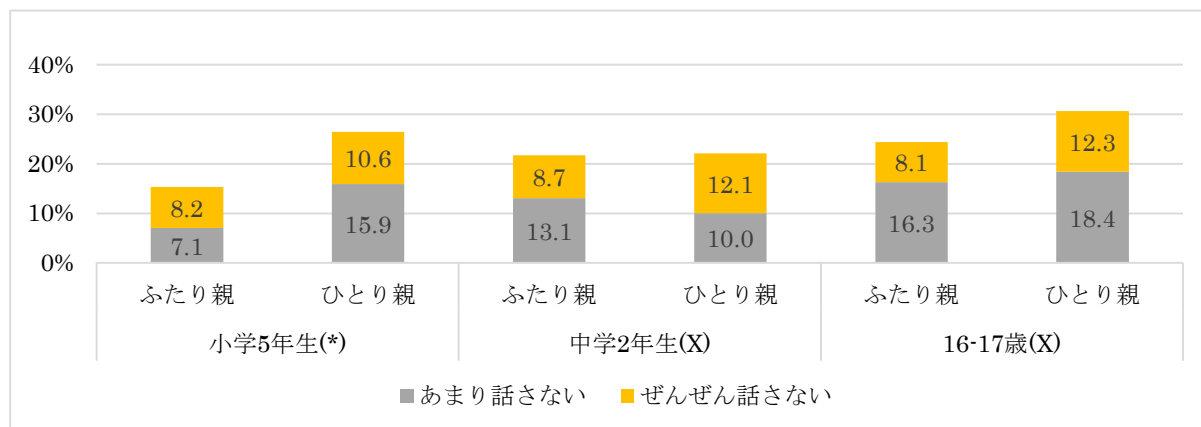
「ふだん、困っていることや悩み事、楽しいことや悲しいこと」を親にどのくらい話すのかを聞いた。調布市の小学5年生は53.4%、中学2年生は43.8%、16-17歳は39.3%が「よく話す」としており、4自治体加重平均もほぼ同じである。一方、「あまり話さない」「ぜんぜん話さない」は、調布市の小学5年生の16.0%、中学2年生の21.6%、16-17歳の24.3%で、小学5年生、16-17歳は4自治体とほぼ同じ水準である。中学2年生の4自治体加重平均は24.6%で差がある。

親と「あまり話さない」「ぜんぜん話さない」割合を世帯タイプ別にみると、小学5年生では、ふたり親世帯(15.3%)よりひとり親世帯(26.5%)の方が多く、その差は約11ポイントにもなる。また、16-17歳では有意な差は認められないものの、ひとり親世帯では、30.7%が親子の会話が乏しい状態にある。生活困難度別には、どの年齢層でも有意な差は認められなかった。

図表 5-4-1 親と会話する頻度：4自治体・調布市



図表 5-4-2 親と会話する頻度：世帯タイプ別



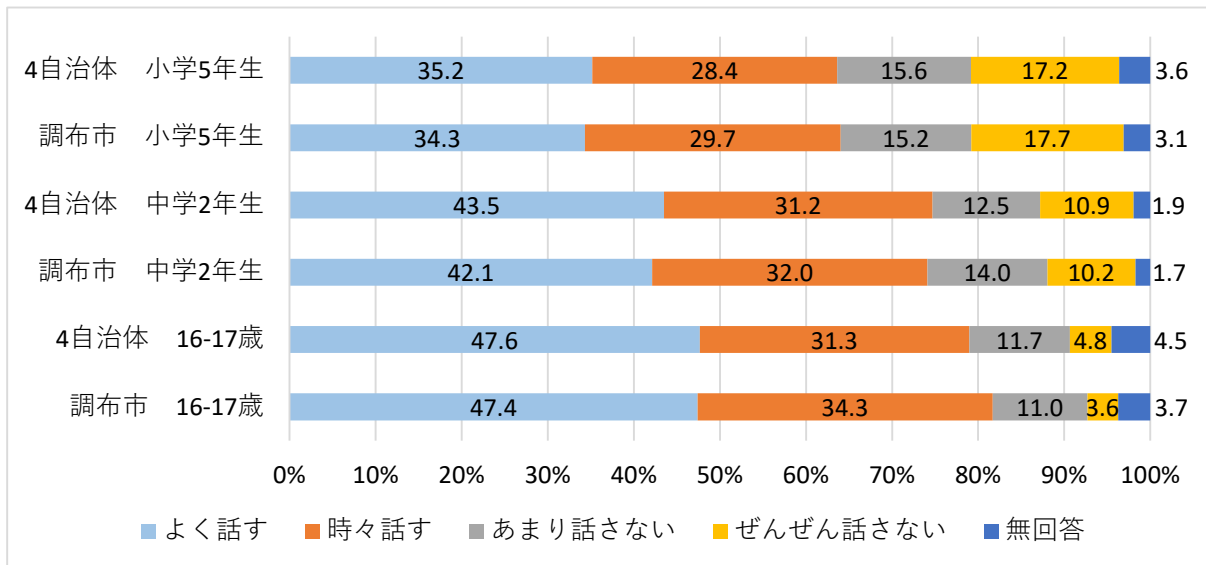
*無回答を除いた割合

(2) 友だちとの会話の頻度

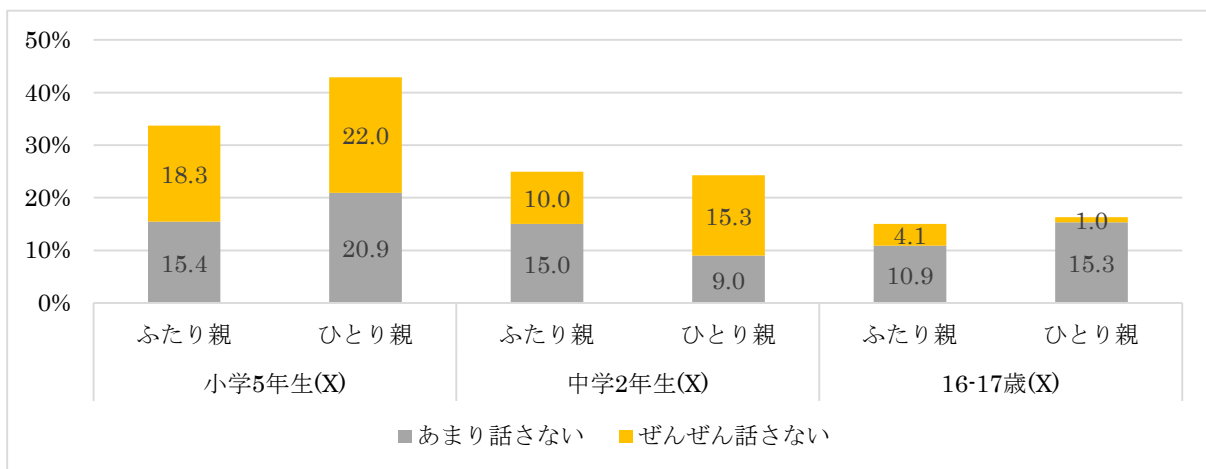
「ふだん、困っていることや悩み事、楽しいことや悲しいこと」を友だちにどのくらい話すかを聞いたところ、全体的な傾向として、年齢が上がるにつれて、友だちと話す頻度は高くなる。調布市の小学5年生は34.3%、中学2年生は42.1%、16-17歳は47.4%が「よく話す」としており、4自治体加重平均もほぼ同じである。一方、「あまり話さない」「ぜんぜん話さない」は、調布市の小学5年生の32.9%、中学2年生の24.2%、16-17歳の14.6%で、4自治体もほぼ同じ水準である。

友だちと「あまり話さない」「ぜんぜん話さない」割合を世帯タイプ別、生活困難度別にみると、どの年齢層でも有意な差は認められなかった。しかしながら、小学5年生のひとり親世帯の子どもは、42.9%が友だちと「あまり話さない」または「ぜんぜん話さない」と答えており、友人関係に難しさを抱えていることがうかがえる。

図表 5-4-3 友だちと会話する頻度：4自治体・調布市



図表 5-4-4 友だちと会話する頻度：世帯タイプ別



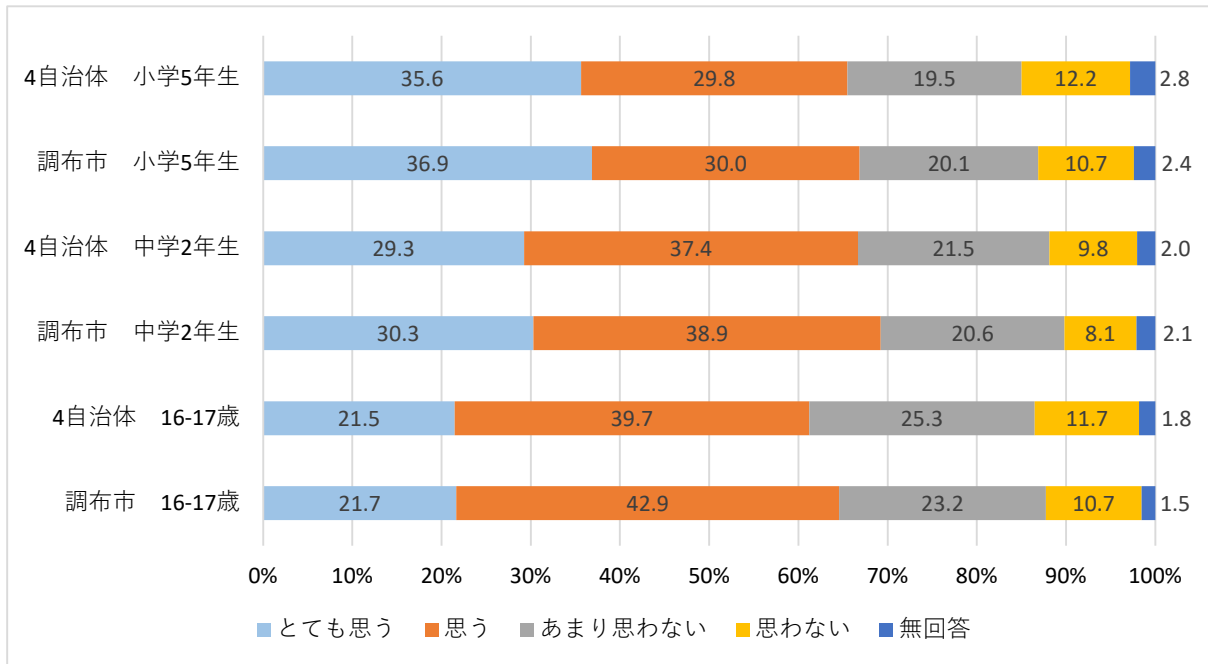
* 無回答を除いた割合

(3) 孤立感

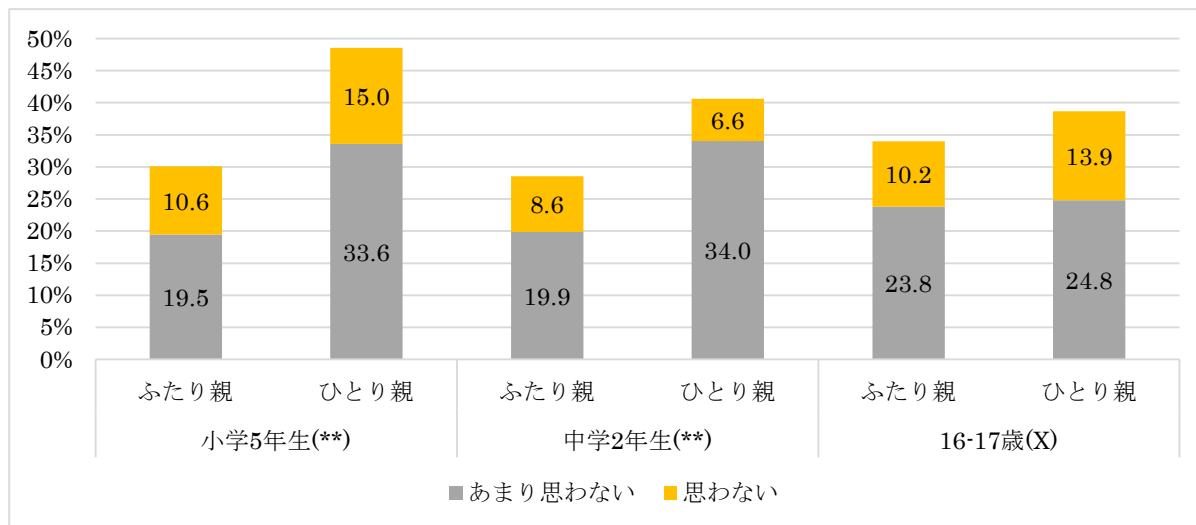
「孤独を感じることはない」という問いに対して「とても思う」「思う」「あまり思わない」「思わない」の4択で聞いた。「とても思う」(孤独を感じない)割合は調布市の小学5年生では36.9%、中学2年生では30.3%、16-17歳では21.7%で、年齢が高くなるにつれて少なくなり、4自治体加重平均とほぼ同じ傾向である。一方で、「あまり思わない」「思わない」、すなわち、孤独を感じている子どもの割合は、どの年齢層でも3割程度であり、調布市の小学5年生は30.8%、中学2年生は28.7%、16-17歳は33.9%である。

孤独を感じている子どもの割合を世帯タイプ別にみると、小学5年生、中学2年生で、ふたり親世帯よりもひとり親世帯で有意に多く、小学5年生のひとり親世帯では48.6%、中学2年生では40.6%にのぼる。また、これを生活困難度別にみてみると、16-17歳で、生活困難層が45.0%と、一般層よりも約11ポイント多い。小学5年生、中学2年生では有意な差は認められないものの、生活困難層の4割弱が孤独を感じている。

図表 5-4-5 孤独を感じることはない：4自治体・調布市

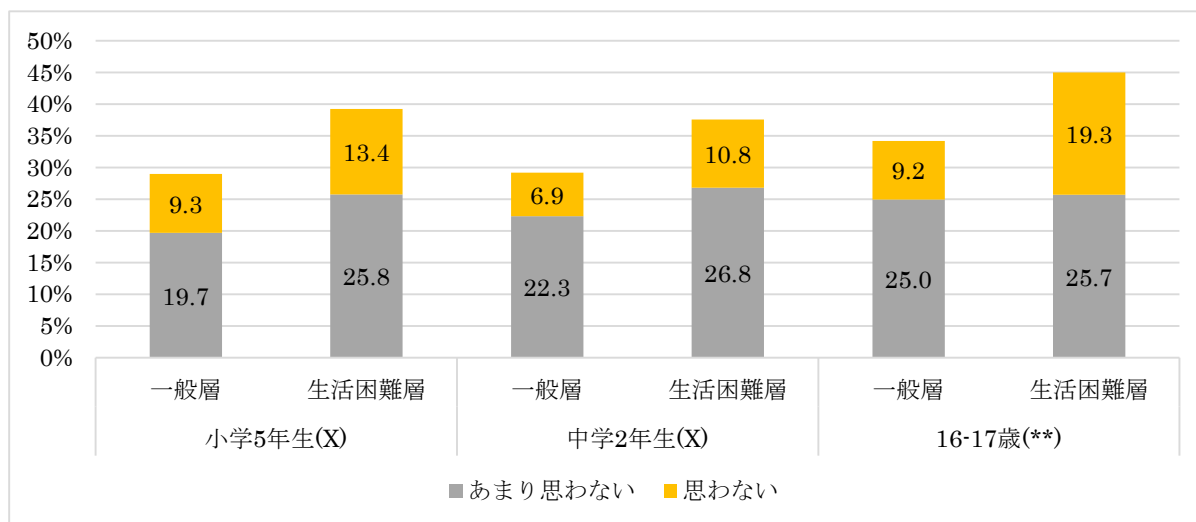


図表 5-4-6 孤独を感じることはない：世帯タイプ別



* 無回答を除いた割合

図表 5-4-7 孤独を感じることはない：生活困難度別



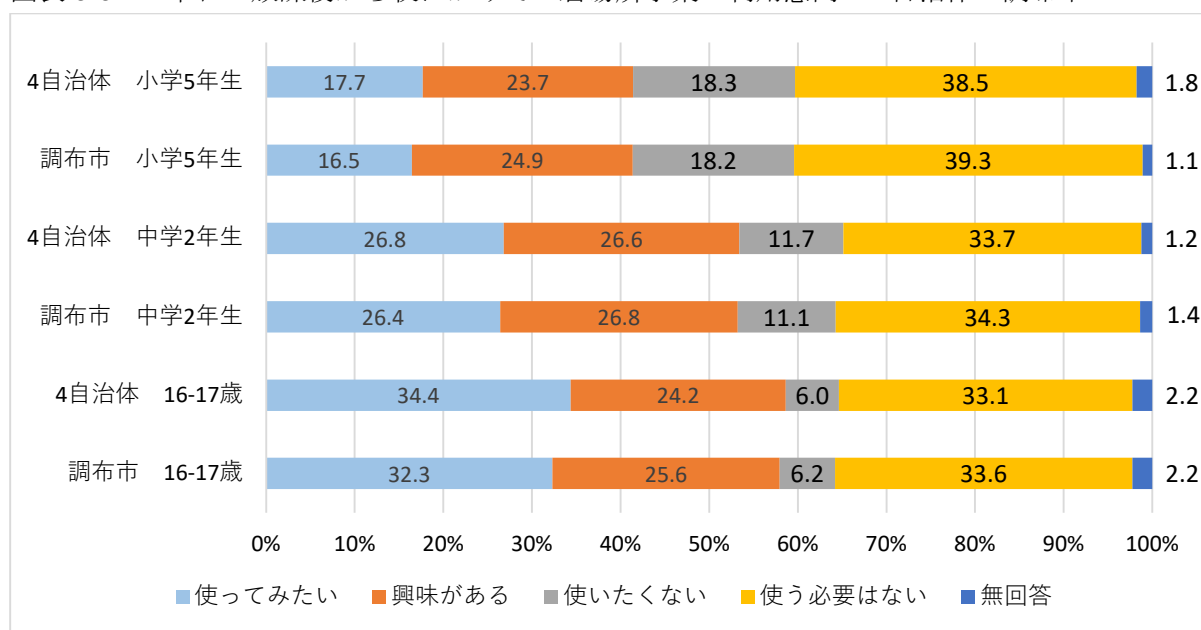
* 無回答を除いた割合

5. 居場所支援・相談事業の利用意向

(1) 平日の放課後に夜までいられる場所

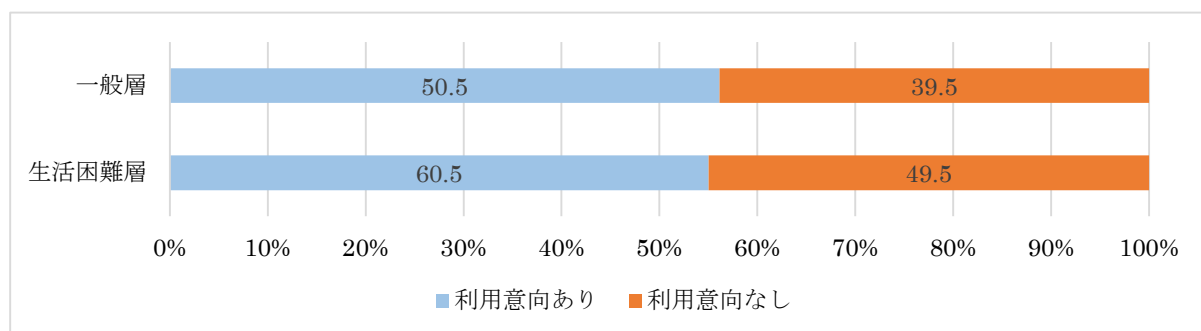
子どもに、どのような事業について利用意向があるのかを聞いた。その結果、「平日の放課後に夜までいることができる場所」を、「使ってみたい」と答えたのは調布市の小学5年生の16.5%、中学2年生の26.4%、16-17歳の32.3%であった。「興味がある」を合わせると、小学5年生の41.4%、中学2年生の53.2%、16-17歳の57.9%が平日の放課後から夜にかけての居場所事業の利用意向がある。すべての年齢層で4自治体加重平均と同様の傾向である。

図表 5-5-1 平日の放課後から夜にかけての居場所事業の利用意向：4自治体・調布市



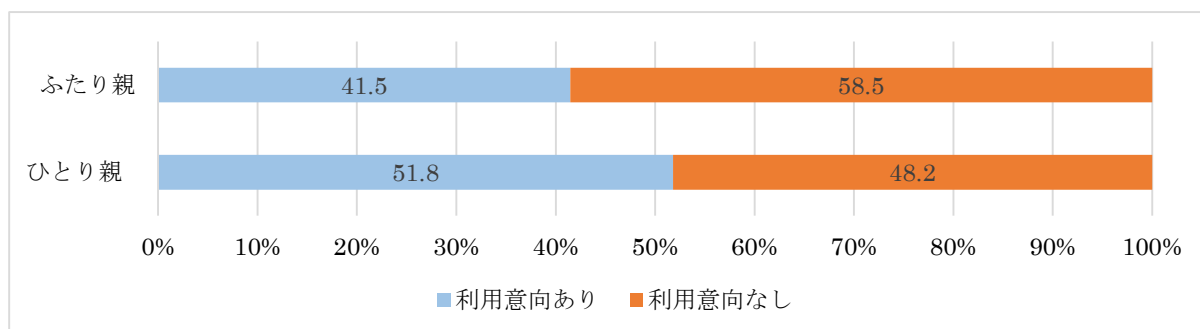
「使ってみたい」「興味がある」を「利用意向あり」とした上で、生活困難度別、世帯タイプ別にみると、中学2年生の生活困難度別のみ有意な差が確認された。中学2年生の一般層の50.5%に対し、生活困難層は60.5%が利用意向を示している。また、統計的に有意ではないものの、ひとり親世帯の小学5年生の51.8%が利用意向をもっている。

図表 5-5-2 平日の放課後から夜にかけての居場所事業の利用意向（中学2年生）：
生活困難度別（**）



* 無回答を除いた割合

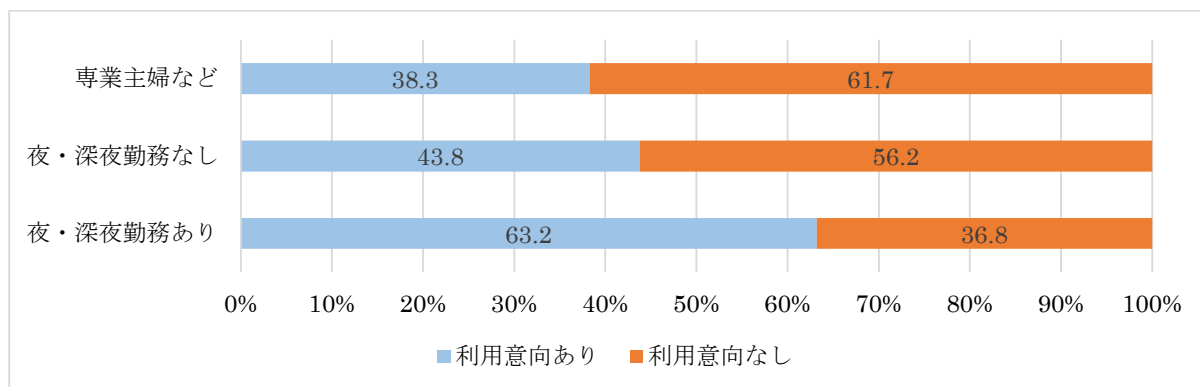
図表 5-5-3 平日の放課後から夜にかけての居場所事業の利用意向（小学 5 年生）：
世帯タイプ別（X）



*無回答を除いた割合

また、母親の就労状況（雇用形態、夜・深夜勤務の状況、週あたり労働時間）との関連をみると、小学 5 年生にて「夜・深夜勤務の状況」と「週あたり労働時間」による有意な差が確認された。夜・深夜勤務の状況別にみると、母親が専業主婦などで就労していない層のうち利用意向のある子どもが 38.3%であるのに対し、母親が就労しているが夜・深夜勤務のない層では 43.8%、母親が就労しておりかつ夜・深夜勤務のある層では 63.2%だった。また、母親の週あたり平均労働時間をみると、利用意向のある層が利用意向のない層よりも有意に長かった。なお、有意な差ではなかったものの、母親の就労状況に関して、中学 2 年生と 16-17 歳においても小学 5 年生と同様の傾向が見られた。

図表 5-5-4 平日の放課後から夜にかけての居場所事業の利用意向（小学 5 年生）：
母親の夜・深夜勤務の状況別 (**)



*無回答を除いた割合

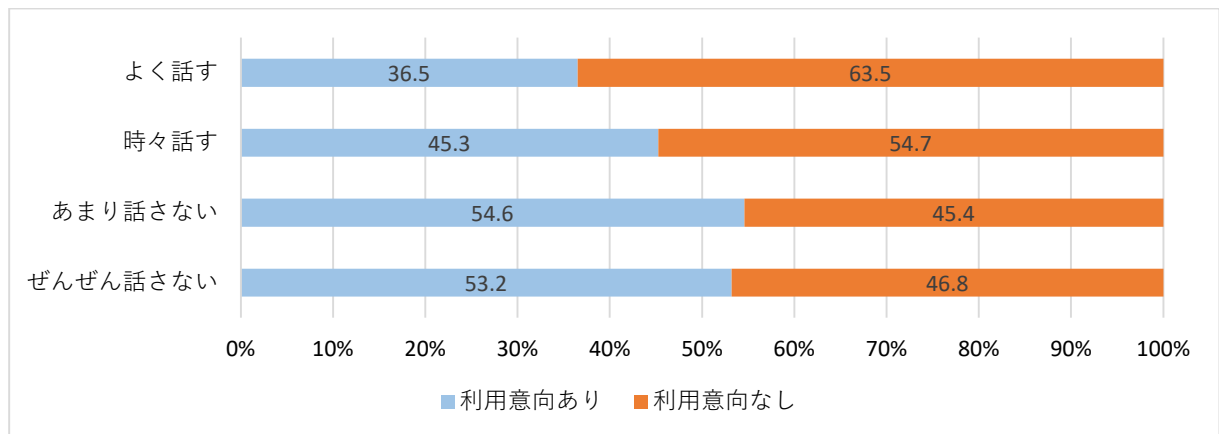
図表 5-5-5 平日の放課後から夜にかけての居場所事業の利用意向と母親の労働時間（小学 5 年生）
(**)

	有効ケース数	母親の週あたり平均労働時間
利用意向あり	340	19.4
利用意向なし	468	16.4

*無回答を除く。専業主婦など就労していない母親の労働時間は 0 時間としている。

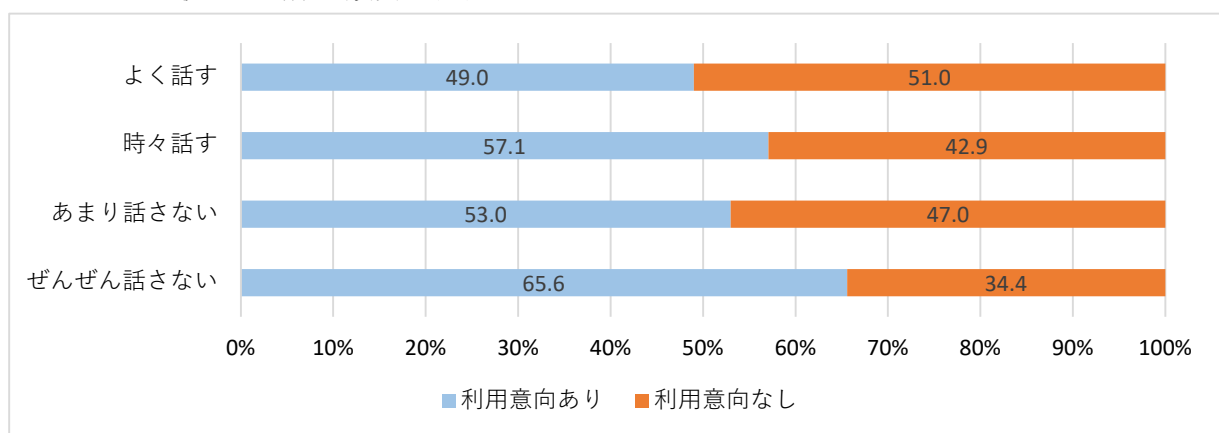
平日の放課後から夜にかけての居場所支援の利用意向を親との会話頻度別にみると、小学5年生では、親に悩みや楽しかったことなどを「あまり話さない」(54.6%)、「ぜんぜん話さない」(53.2%)で利用意向が比較的多い。中学2年生では、「ぜんぜん話さない」(65.6%)で利用意向が多い。16-17歳でも、親と「あまり話さない」(65.1%)、「まったく話さない」(67.7%)で利用意向が多い。友だちと一緒にたくさん遊んでいる程度別にみると、小学5年生では「とてもそう思う」(44.6%)、中学2年生では「とてもそう思う」(56.6%)、「そう思う」(57.5%)で利用意向が多い。16-17歳では友だちとどの程度遊ぶかという設問がないため、友だちとの会話別でみると、有意な差はみられなかった。親との会話が比較的小さい子どもたち(小学生から16-17歳まで)に平日の居場所事業が望まれている一方、友だちとあまり一緒に遊ばない子どもたちは平日の居場所事業をあまり希望しない傾向が見受けられる。

図表 5-5-6 平日の放課後から夜にかけての居場所事業の利用意向(小学5年生):
親との会話の頻度別(***)



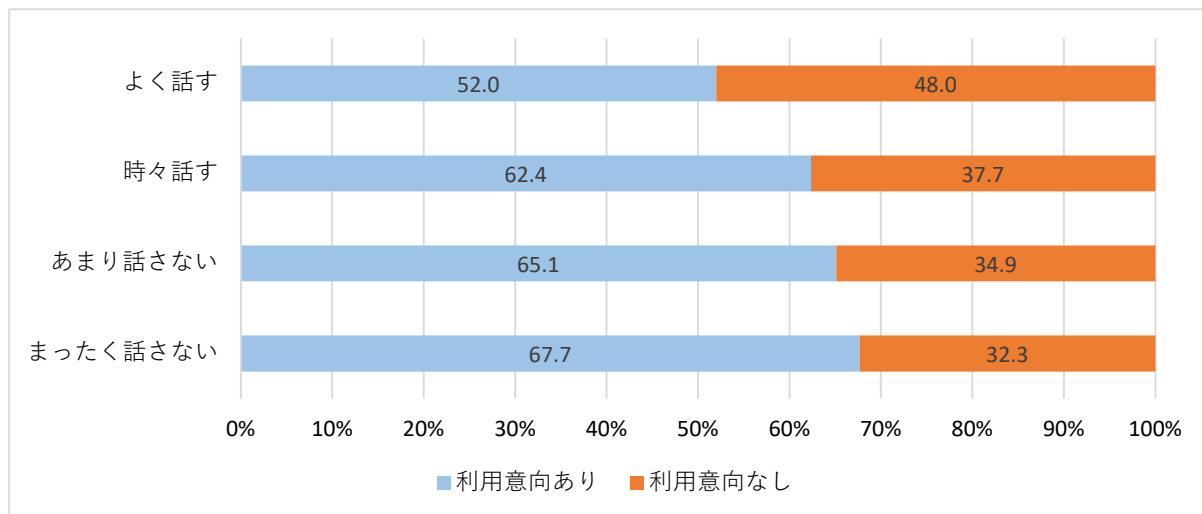
* 無回答を除いた割合

図表 5-5-7 平日の放課後から夜にかけての居場所事業の利用意向(中学2年生):
親との会話の頻度別(**)



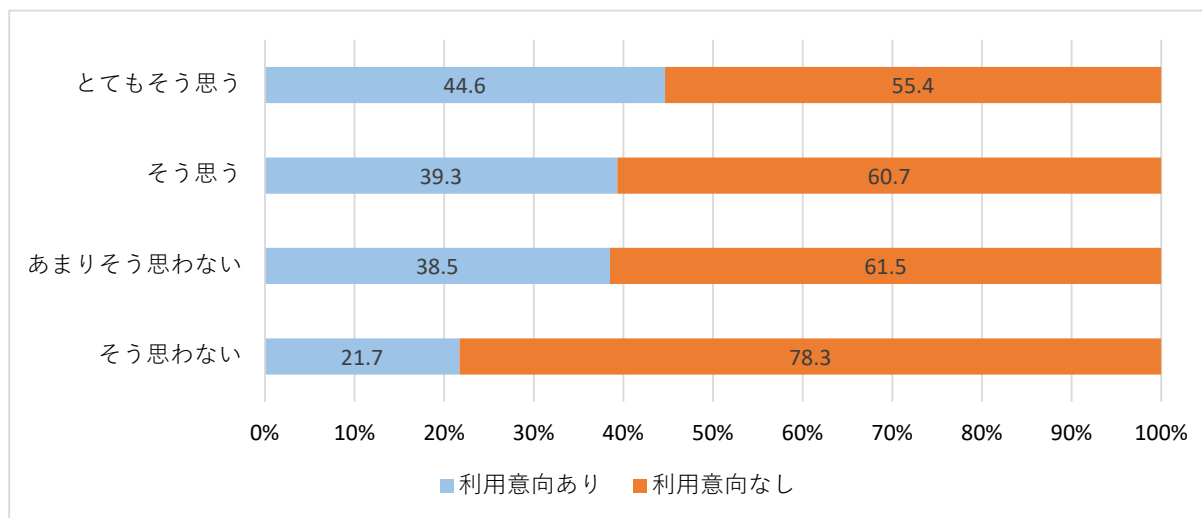
* 無回答を除いた割合

図表 5-5-8 平日の放課後から夜にかけての居場所事業の利用意向（16・17歳）：
親との会話の頻度別(**)



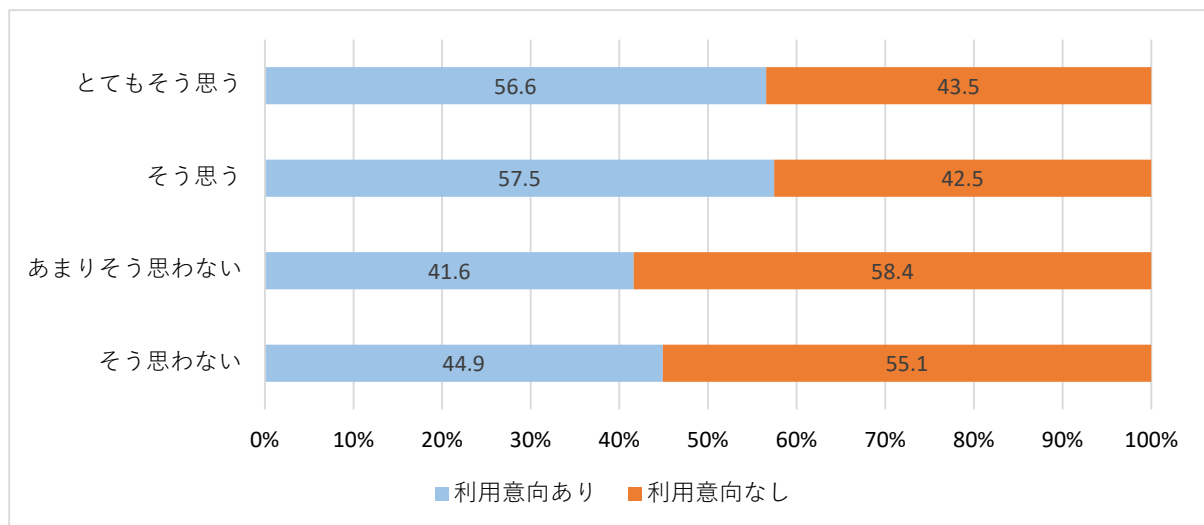
* 「該当する人はいない」および無回答を除いた割合

図表 5-5-9 平日の放課後から夜にかけての居場所事業の利用意向（小学5年生）：
友だちと一緒にたくさん遊んでいる程度別(*)



* 無回答を除いた割合

図表 5-5-10 平日の放課後から夜にかけての居場所事業の利用意向（中学2年生）：
友だちと一緒にたくさん遊んでいる程度別(**)

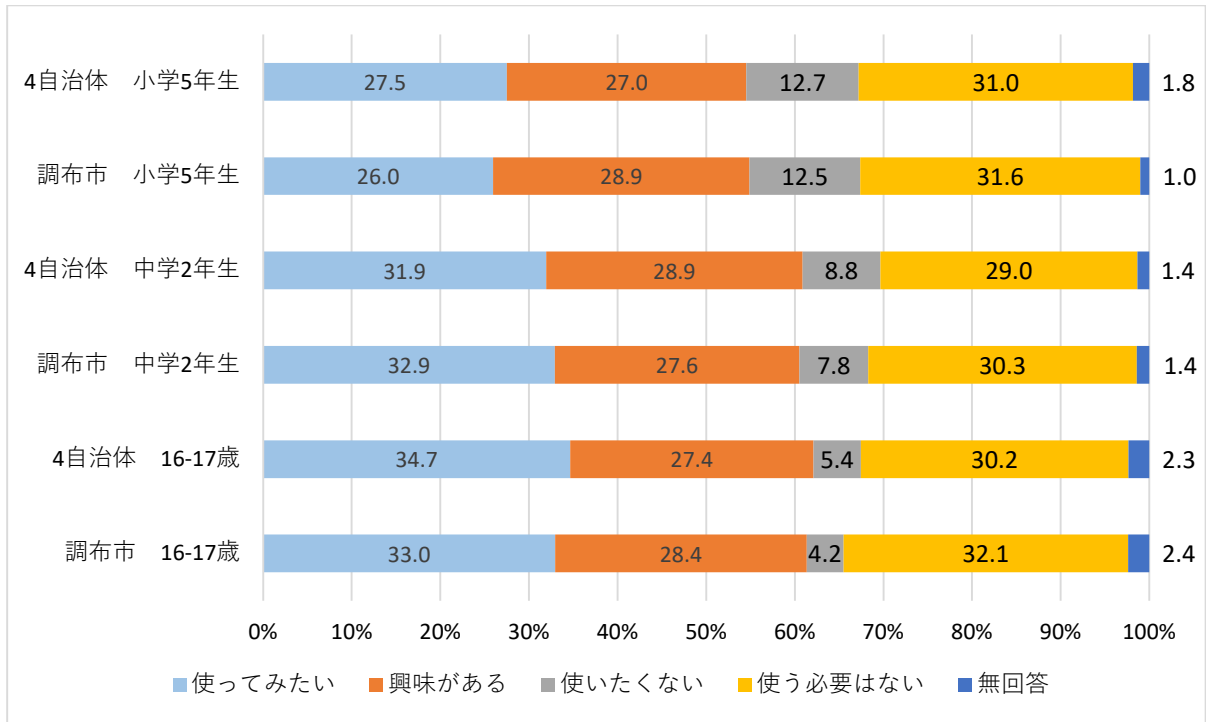


*無回答を除いた割合

(2) 休日にいられる場所

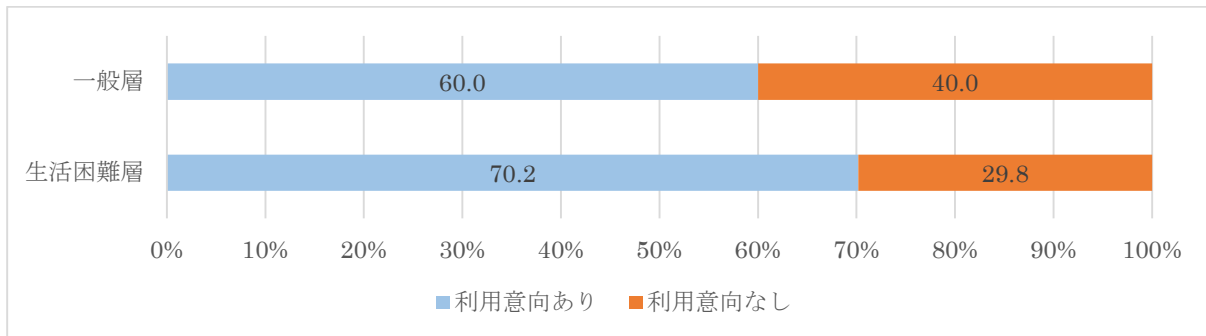
「家以外で休日にいることができる場所」を、「使ってみたい」と答えたのは調布市の小学5年生の26.0%、中学2年生の32.9%、16-17歳の33.0%であった。「興味がある」を合わせると、小学5年生の54.9%、中学2年生の60.5%、16-17歳の61.4%が「休日にいることができる場所」の利用意向がある。すべての年齢層で、4自治体加重平均もほぼ同様の割合ある。

図表 5-5-11 休日の居場所事業の利用意向：4自治体・調布市



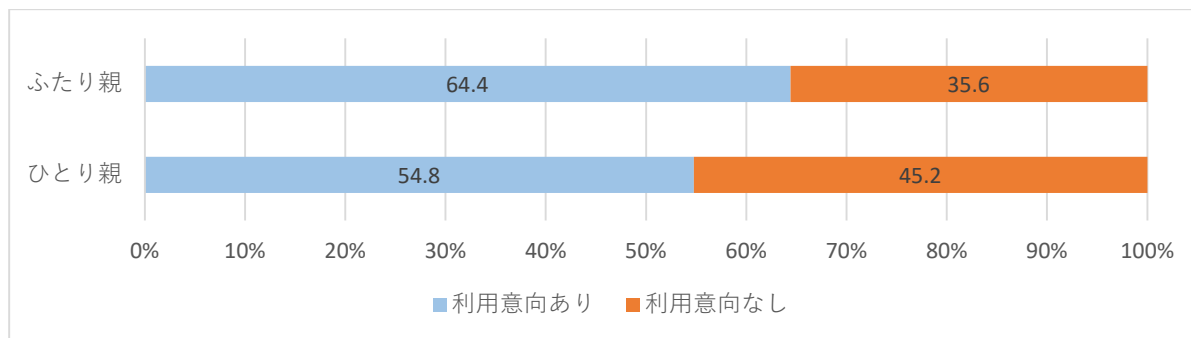
「使ってみたい」「興味がある」を「利用意向あり」とした上で、生活困難度別にみると、中学2年生の生活困難度のみに有意な差が確認された。中学2年生の一般層の利用意向が60.0%であるのに対し、生活困難層の利用意向は70.2%にのぼる。また、世帯タイプ別にみると、16-17歳のみに有意な差が認められ、ふたり親世帯の64.4%が利用意向をもっており、ひとり親世帯よりも10ポイント多い。

図表 5-5-12 休日の居場所事業の利用意向（中学2年生）：生活困難度別 (**)



* 無回答を除いた割合

図表 5-5-13 休日の居場所事業の利用意向（16-17歳）：世帯タイプ別（*）



*無回答を除いた割合

また、母親の就労状況（雇用形態、土日勤務の状況、週あたり労働時間）との関連をみると、小学5年生では、利用意向のある層の母親の週あたり平均労働時間が、利用意向のない層よりも有意に長かった。中学2年生では、母親の土日勤務の状況により有意な差があり、「母親が就労しているが土日勤務のない層」では「利用意向あり」が67.0%と、「母親が専業主婦などで就労していない層」（57.5%）、「母親が就労しておりかつ土日勤務のある層」（57.0%）よりも約10ポイント多い。16-17歳では、母親が「自営業等」の世帯の子どもたちの68.7%、「非正規職員」の世帯の子どもたちの67.6%が利用意向をもっている一方、母親が「正規職員」の世帯の子どもたちの利用意向は51.7%にとどまる。

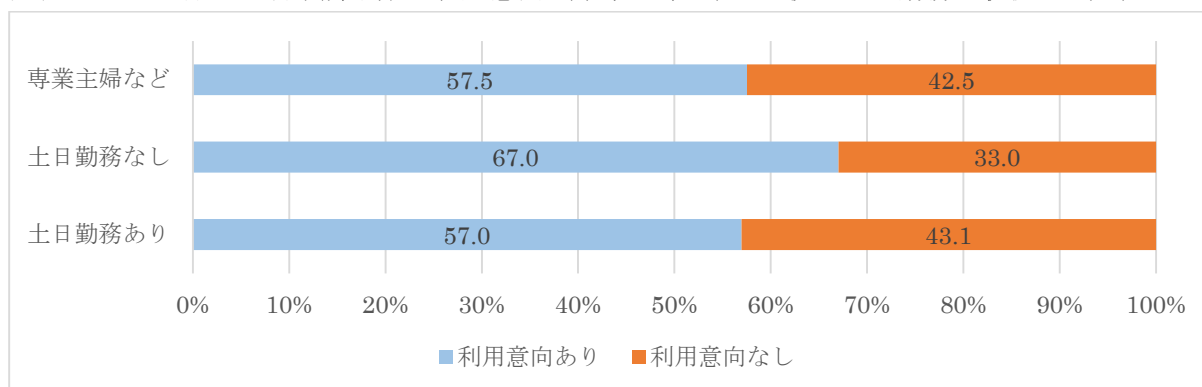
平日放課後の居場所事業においては、母親が就労しており、なおかつその就労が不規則であったり、長時間にわたる層の利用意向が強まる傾向にあったが、休日の居場所事業にはそのような傾向はみとれない。

図表 5-5-14 休日の居場所事業の利用意向と母親の労働時間（小学5年生）

	有効ケース数	母親の週あたり平均労働時間
利用意向あり	450	18.6
利用意向なし	359	16.4

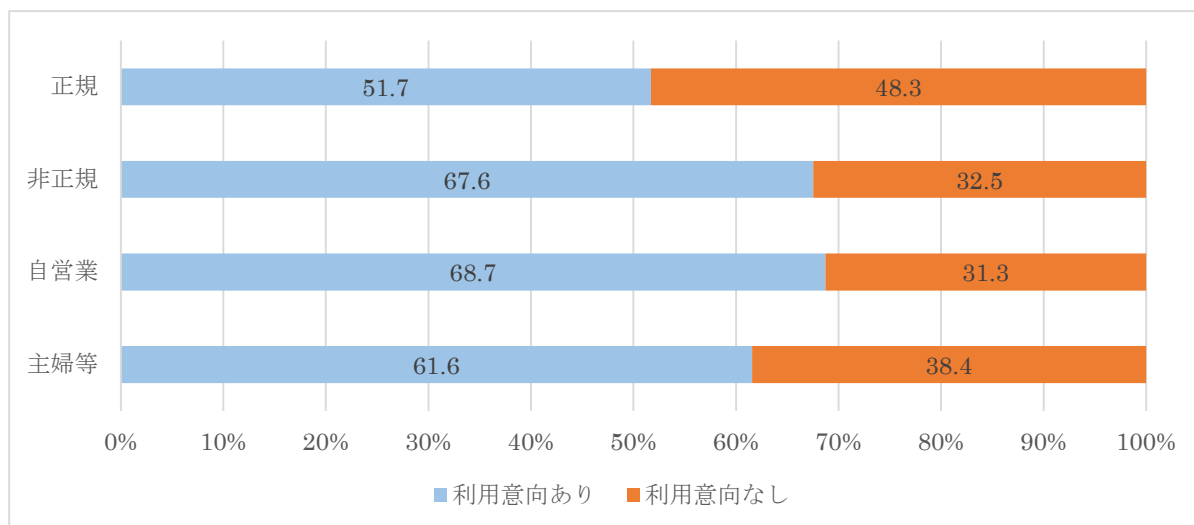
*無回答を除く。専業主婦など就労していない母親の労働時間は0時間としている。

図表 5-5-15 休日の居場所事業の利用意向（中学2年生）：母親の土日勤務の状況別（**）



*無回答を除いた割合

図表 5-5-16 休日の居場所事業の利用意向（16-17 歳）：母親の雇用形態別 (**)

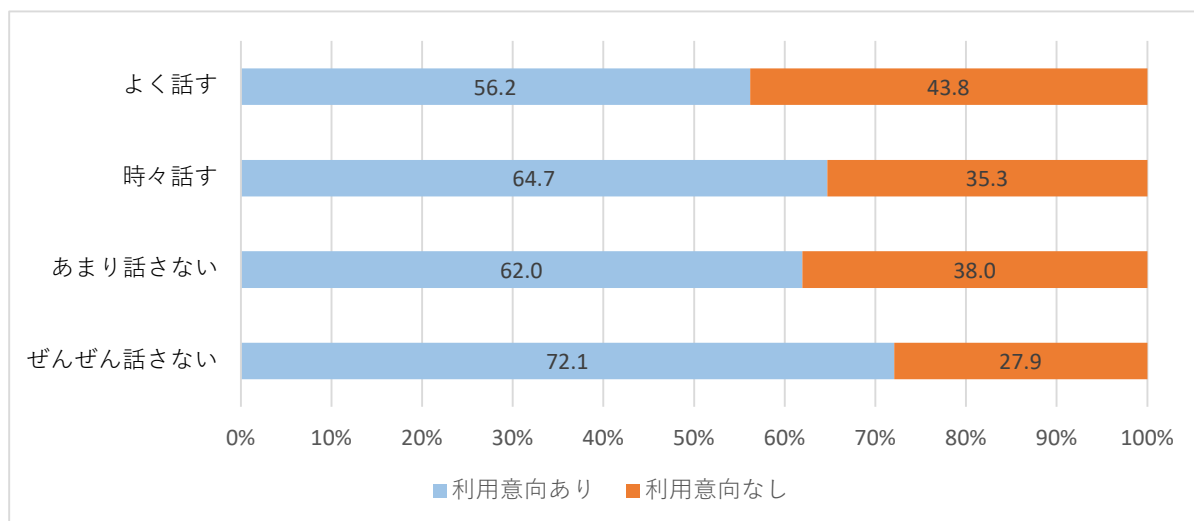


* 無回答を除いた割合

休日の居場所事業の利用意向を親との会話の頻度別および友だちと一緒にたくさん遊ぶ程度別（16-17 歳は友だちとの会話の頻度別）にみると、小学 5 年生と 16-17 歳では有意な差はみられない。中学 2 年生では、親に悩み事などを「ぜんぜん話さない」子ども（72.1%）、「友だちと一緒にたくさん遊んでいる」子ども（62.6~66.1%）で利用意向が比較的多い。

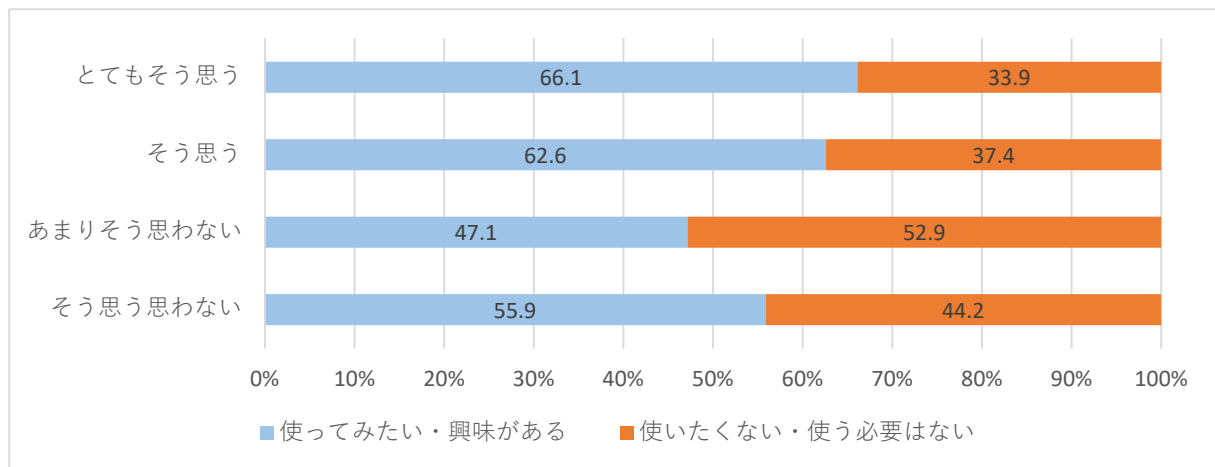
地区別にみると、小学 5 年生、中学 2 年生ともに有意な差は確認されなかった。

図表 5-5-17 休日の居場所事業の利用意向（中学 2 年生）：親との会話の頻度別(**)



* 無回答を除いた割合

図表 5-5-18 休日の居場所事業の利用意向（中学2年生）：
友だちと一緒にたくさん遊んでいる程度別(***)

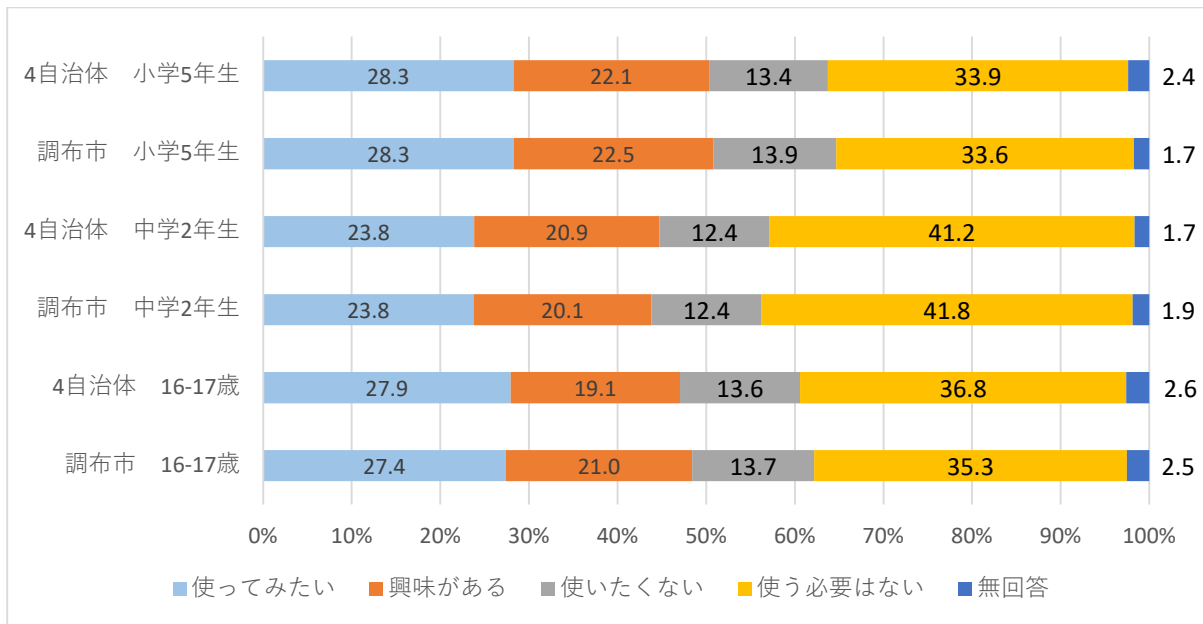


*無回答を除いた割合

(3) 子ども食堂

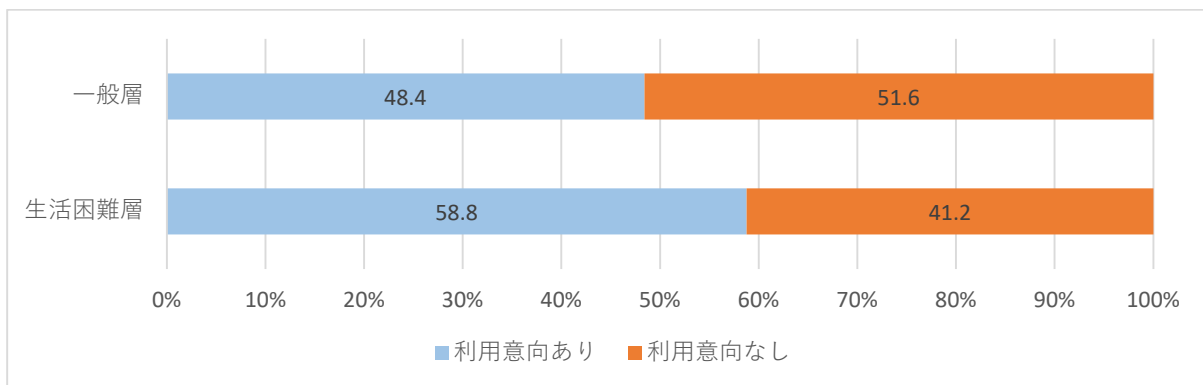
子ども食堂の潜在的ニーズを測るために、子どもに「家の人がない時、夕ごはんをみんなで食べることができる場所」(16-17歳は「(家以外で)家の人がない時、低額・無料で夕ごはんを他の人と食べることができる場所」)の利用意向についてきいた。その結果、「使ってみたい」としたのは、調布市の小学5年生の28.3%、中学2年生の23.8%、16-17歳の27.4%であった。「興味がある」を合わせると、どの年齢層でも4割～5割程度の子どもの「子ども食堂」の利用意向がある。なお、すべての年齢層で4自治体加重平均もほぼ同様の割合であった。

図表 5-5-19 子ども食堂の利用意向：4自治体・調布市



「使ってみたい」「興味がある」を「利用意向あり」とした上で、生活困難度別、世帯タイプ別にみたところ、統計的に有意な差が確認されたのは16-17歳の生活困難度別のみであった。16-17歳の生活困難層の利用意向は58.8%で、一般層よりも約10ポイント多い。

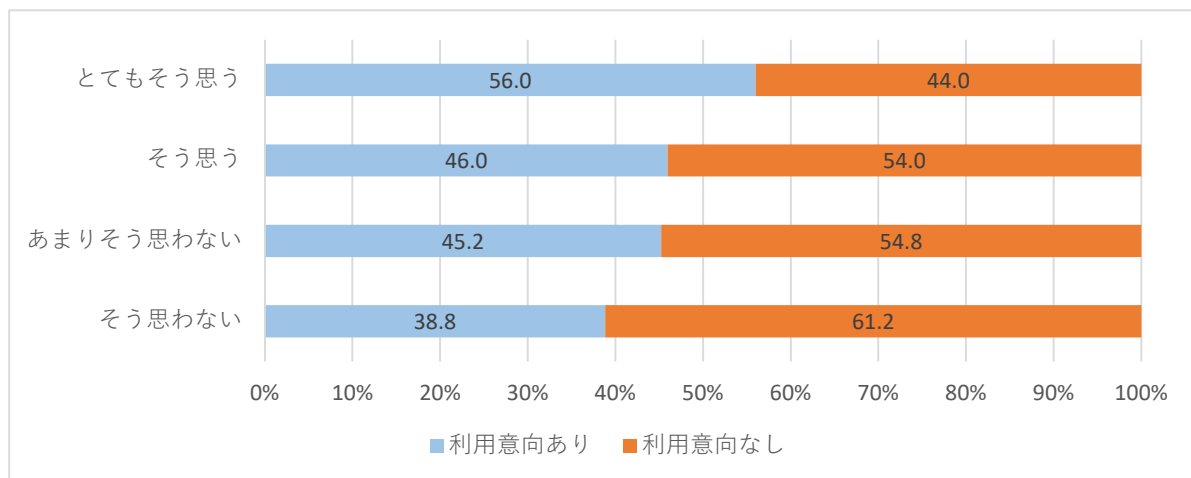
図表 5-5-20 子ども食堂の利用意向（16-17歳）：生活困難度別(**)



*無回答を除いた割合

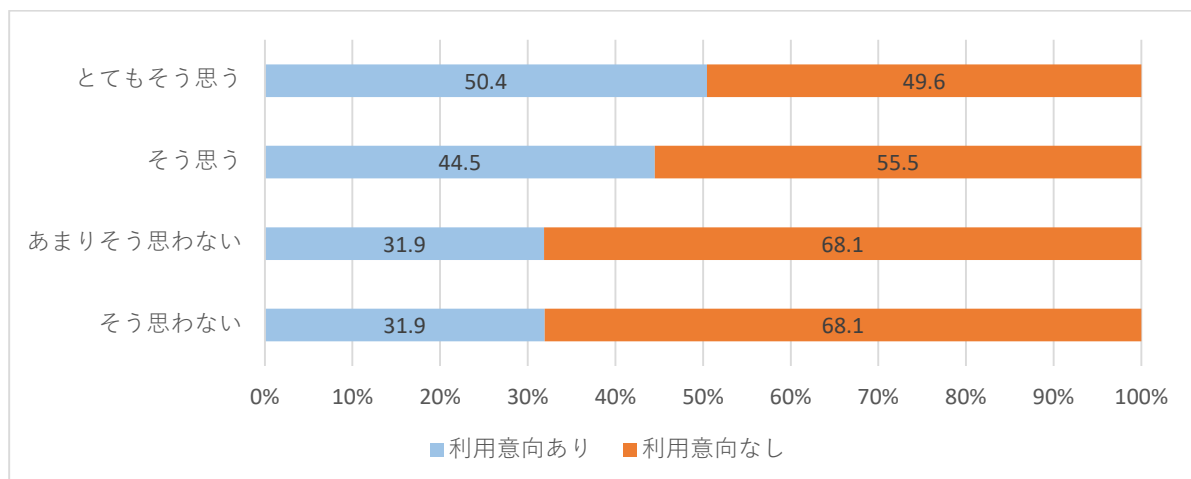
親との会話の頻度別にみると、どの年齢層でも有意な差は確認されなかった。友だちとたくさん遊んでいる程度別（16-17歳は友だちとの会話の頻度別）にみると、どの年齢層でも、友だちと一緒にたくさん遊んでいる、友だちとよく会話している子どもほど利用意向が多い。したがって、子ども食堂事業（家の人がいない時、夕ごはんをみんなで食べることができる場所）は、友だちづきあいが比較的うまくいっている子ども向けの事業であり、友だち付き合いが苦手な子どもたちに参加を働きかける場合は、工夫が必要といえよう。また、16-17歳を対象とする場合、貧困対策として位置づけることができるが、小中学生対象の場合は、貧困対策の性質はうすれる。

図表 5-5-21 子ども食堂の利用意向(小学5年生):友だちと一緒にたくさん遊んでいる程度別(**)



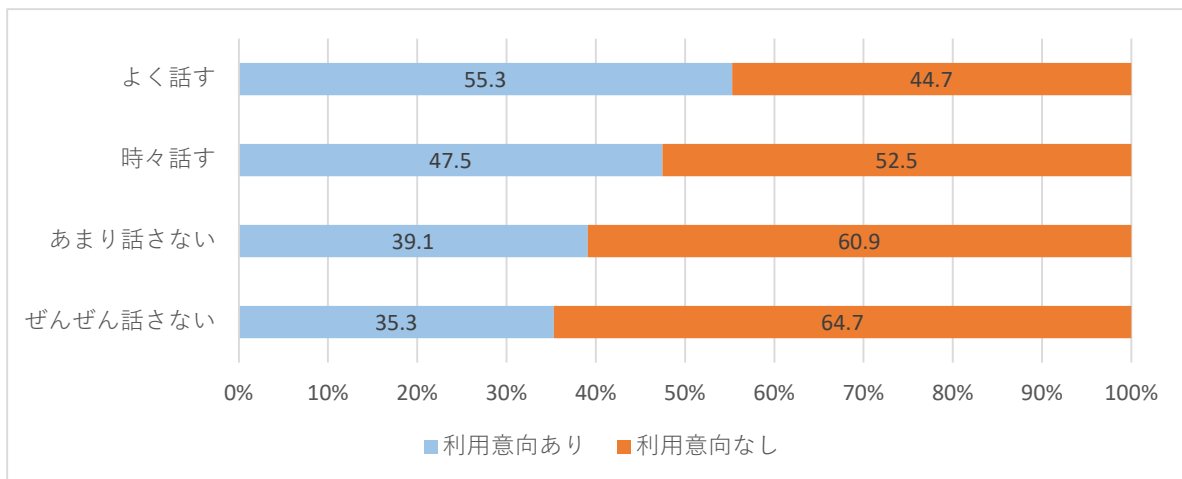
* 無回答を除いた割合

図表 5-5-22 子ども食堂の利用意向(中学2年生):友だちと一緒にたくさん遊んでいる程度別(***)



* 無回答を除いた割合

図表 5-5-23 子ども食堂の利用意向（16-17歳）：友だちとの会話の頻度別(**)

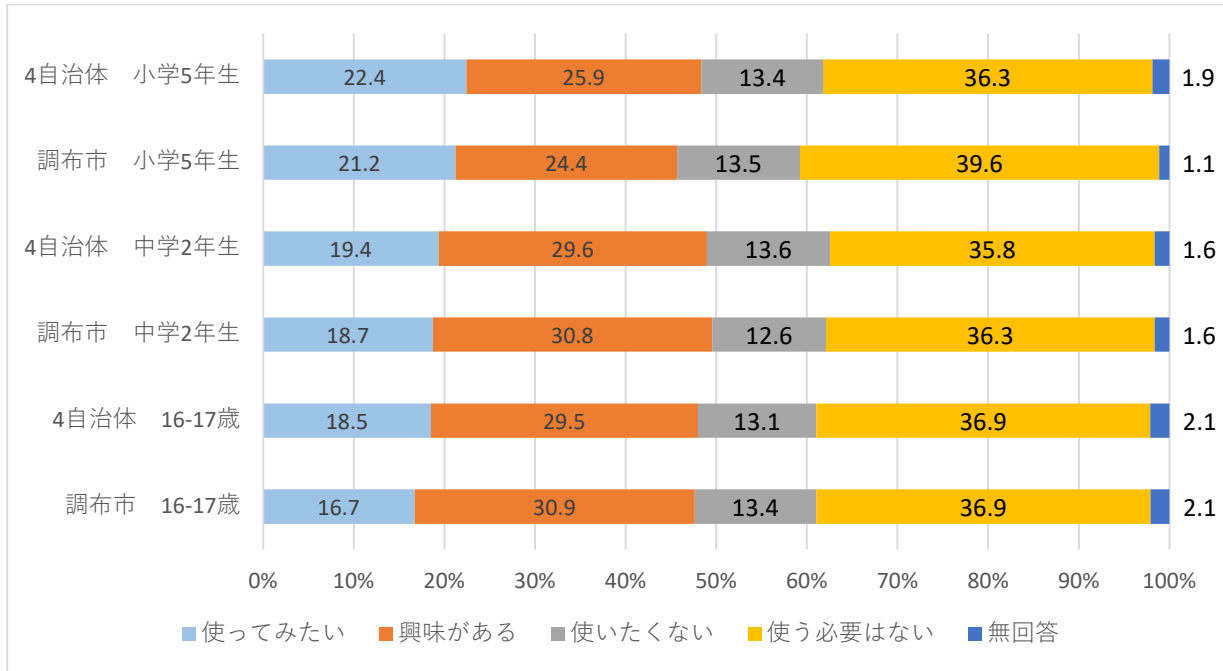


*無回答を除いた割合

(4) なんでも相談できる場所

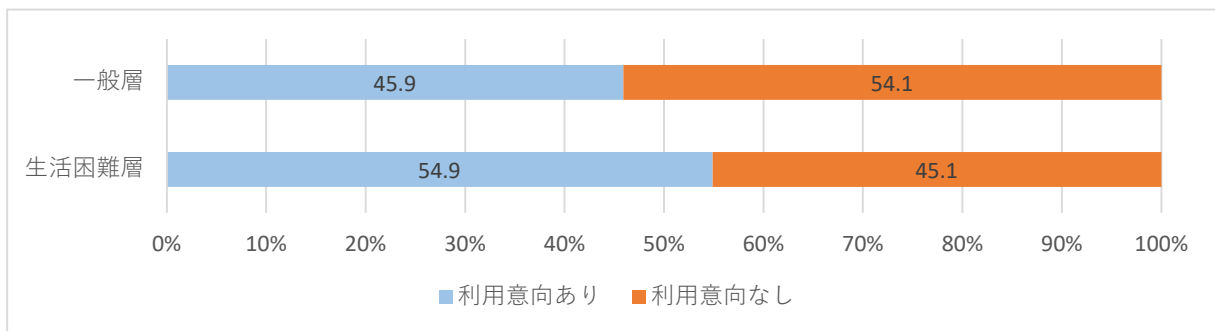
「(学校以外で) なんでも相談できる場所」(中学2年生「(学校以外で) 勉強、進学、家族のことなど、なんでも相談できる場所」、16-17歳「(学校以外で) 進路や勉強、家族のことなどなんでも相談できる場所」)については、調布市の小学5年生の21.2%、中学2年生の18.7%、16-17歳の16.7%が「使ってみたい」と答えている。「興味がある」を合わせた割合は、小学5年生45.6%、中学2年生49.5%、16-17歳47.6%となる。

図表 5-5-24 なんでも相談できる場所の利用意向



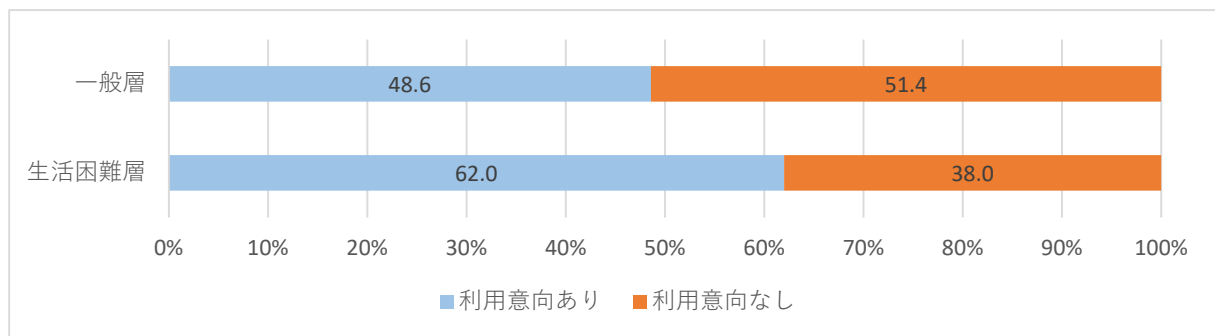
「使ってみたい」「興味がある」を「利用意向あり」とした上で、生活困難度別、世帯タイプ別にみると、小学5年生と中学2年生において生活困難度による有意な差が確認された。利用意向をもつ子どもの割合が、一般層では小学5年生45.9%、中学2年生48.6%であるのに対し、生活困難層では小学5年生54.9%、中学2年生62.0%にのぼる。

図表 5-5-25 なんでも相談できる場所の利用意向 (小学5年生) : 生活困難度別



* 無回答を除いた割合

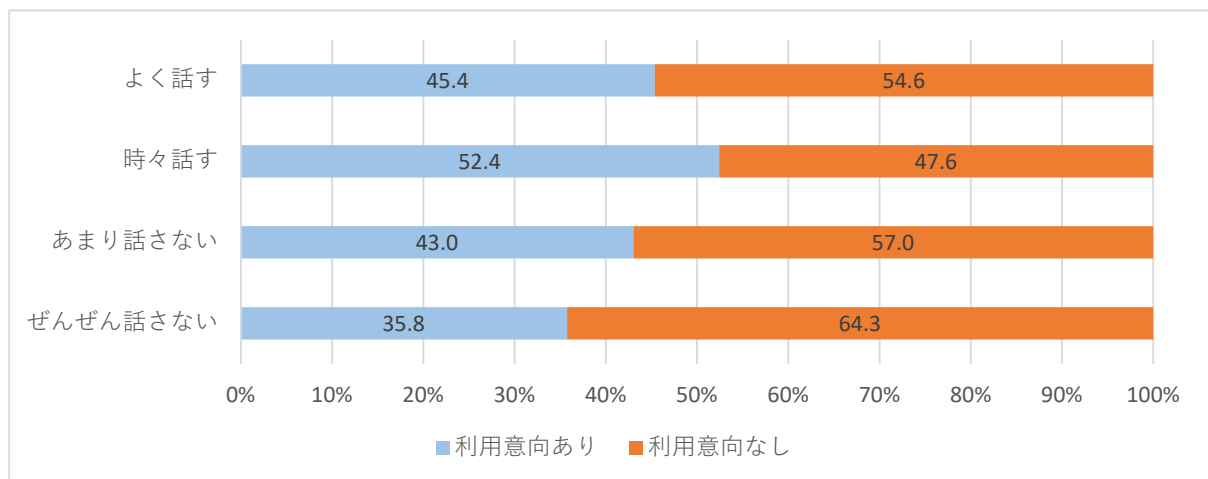
図表 5-5-26 なんでも相談できる場所の利用意向（中学 2 年生）：生活困難度別(***)



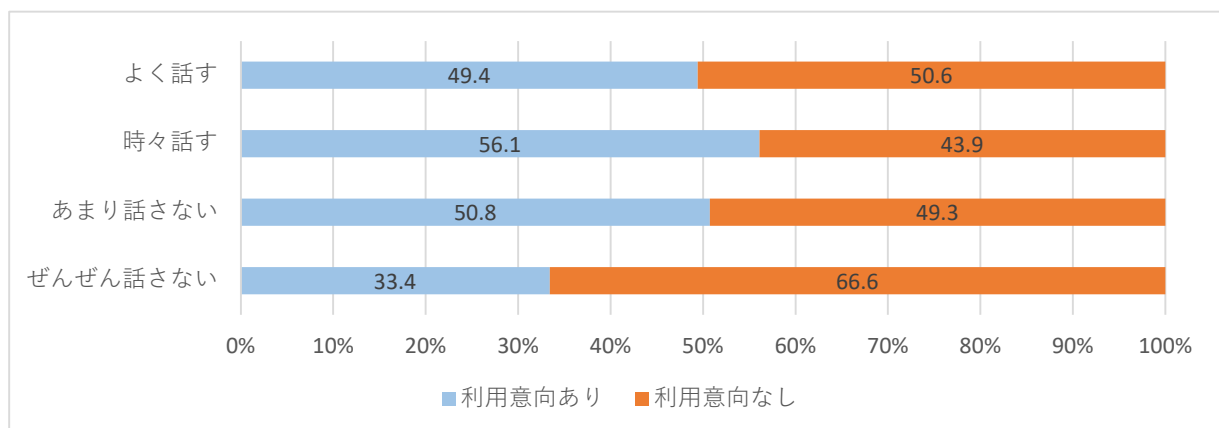
*無回答を除いた割合

親との会話の頻度別には、どの年齢層でも有意な差が認められ、親と「よく話す」「時々話す」「あまり話さない」子どもたちの間で利用意向が比較的多い（小学 5 年生は 43.0～52.4%、中学 2 年生は 49.4～56.1%、16-17 歳は 59.5～66.3%）。

図表 5-5-27 なんでも相談できる場所の利用意向（小学 5 年生）：親との会話の頻度別(*)

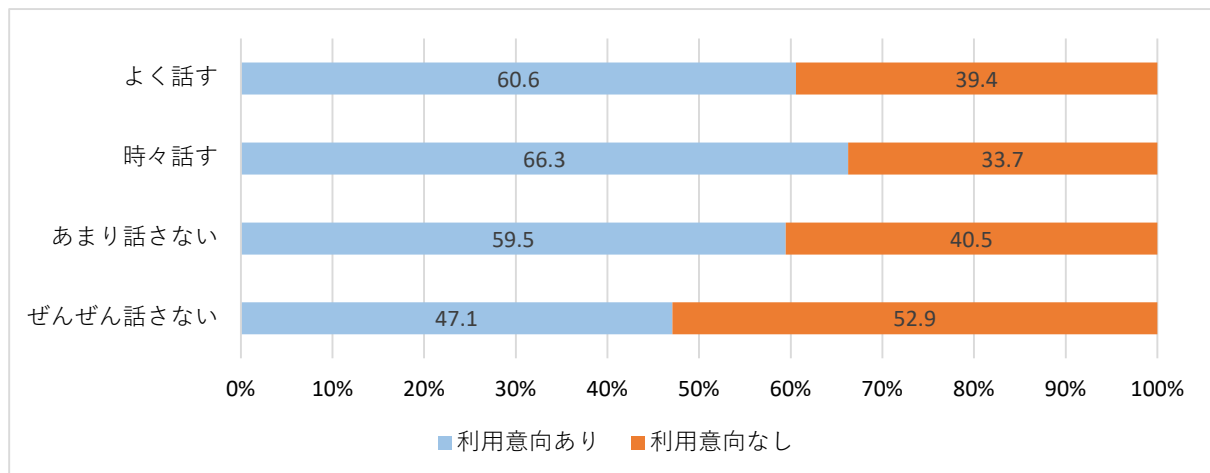


図表 5-5-28 なんでも相談できる場所の利用意向（中学 2 年生）：親との会話の頻度別(***)



*無回答を除いた割合

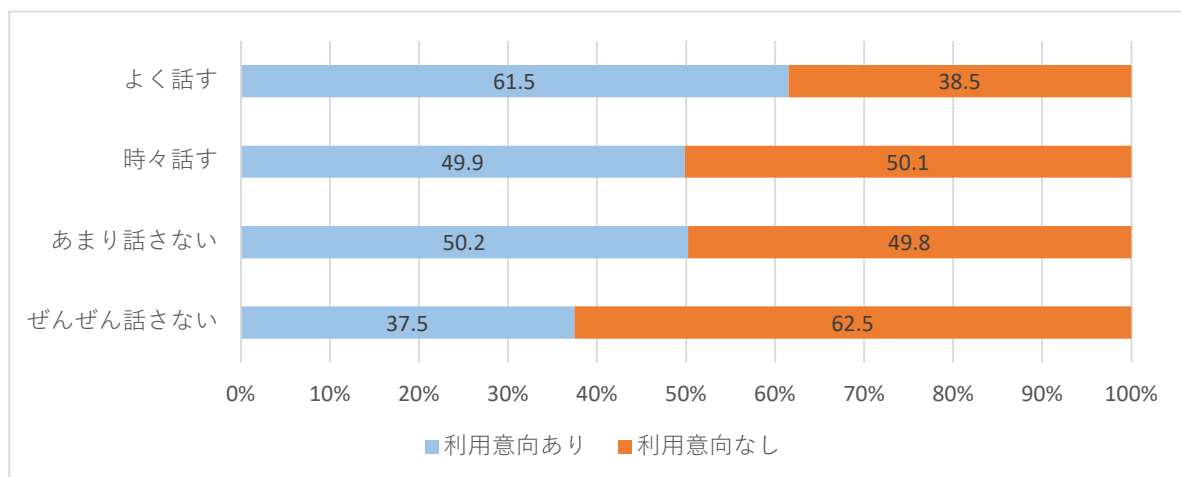
図表 5-5-29 なんでも相談できる場所の利用意向（16-17歳）：親との会話の頻度別(*)



*無回答を除いた割合

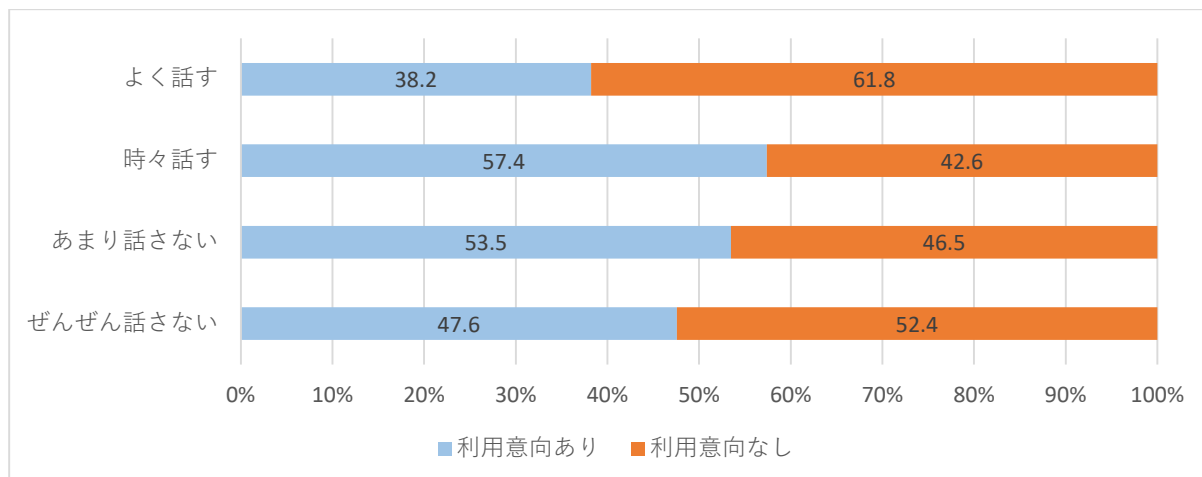
学校の先生との会話の頻度別には、小学5年生と中学2年生で有意な差が認められた。小学5年生で学校の先生と「ぜんぜん話さない」子どもは利用意向が37.5%で、学校の先生と「よく話す」子どもよりも24ポイントも低い。したがって、学校の先生と「ぜんぜん話さない」子どもにより望まれているという観点から、学校以外でなんでも相談できる場所は、中学2年生を対象に実施すると有意義であると言える。

図表 5-5-30 なんでも相談できる場所の利用意向（小学5年生）：
学校の先生との会話の頻度別(***)



*無回答を除いた割合

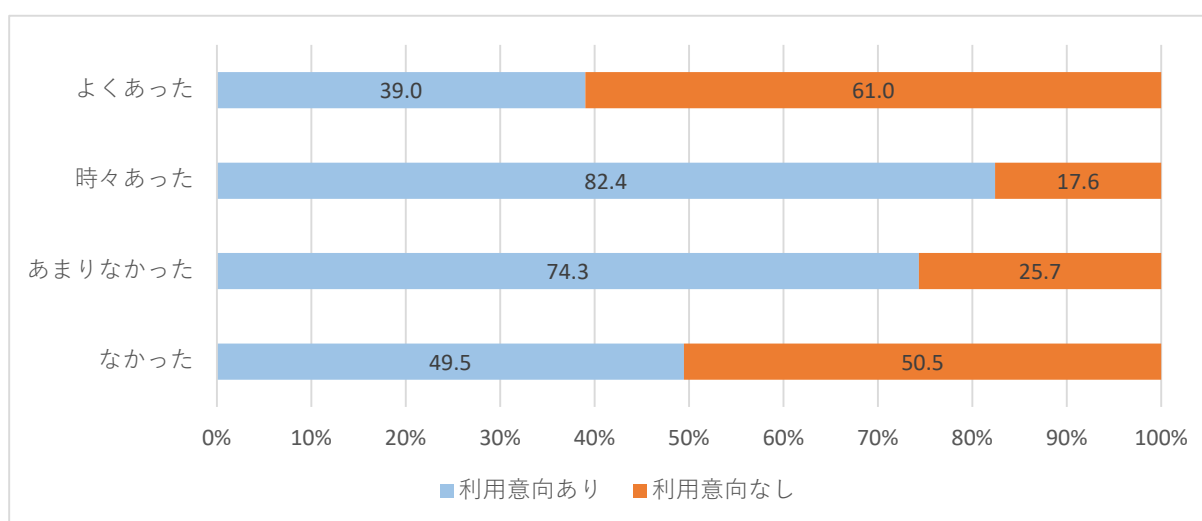
図表 5-5-31 なんでも相談できる場所の利用意向(中学2年生):学校の先生との会話の頻度別(*)



*無回答を除いた割合

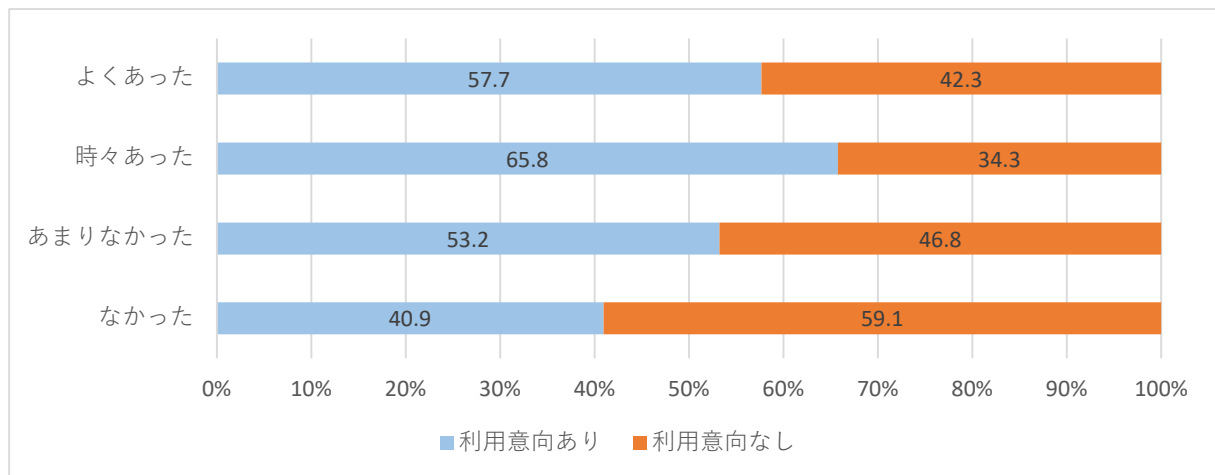
小中学生について、1か月以上学校を休んだ経験別にみると、中学2年生でのみ有意な差がみられ、1か月以上学校を休んだことがたまにあった(「時々あった」「あまりなかった」)子どもたちは、74.3~82.4%が学校以外でなんでも相談できる場所の利用意向をもっている。また、いじめられた経験別にみてみると、どちらの学年でも有意な差が確認された。いじめられたことがある小学5年生は53.2~65.8%、中学2年生は67.2~74.6%が利用意向をもっている。したがって、学校以外でなんでも相談できる場所は、学校生活で困難を抱えている子どもたち、とくに中学生でニーズが大きいと言える。現在ある相談窓口を子どもたちにとって利用しやすいものにしていくことや、地域の居場所事業のなかで相談できる環境をつくっていくことなどが課題として挙げられる。

図表 5-5-32 なんでも相談できる場所の利用意向(中学2年生):
1か月以上学校を休んだ経験別(*)

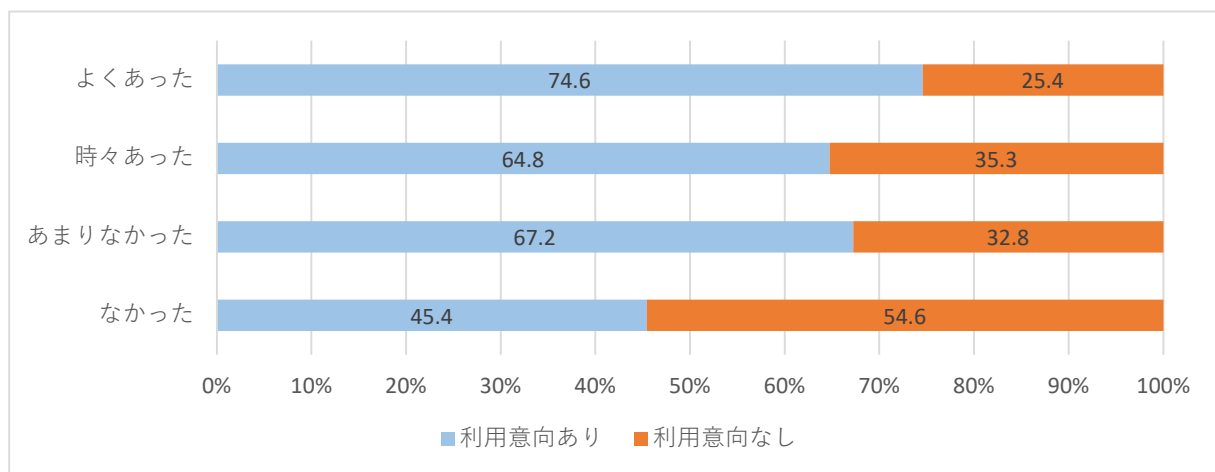


*無回答を除いた割合

図表 5-5-33 なんでも相談できる場所の利用意向（小学5年生）：いじめられた経験別(***)



図表 5-5-34 なんでも相談できる場所の利用意向（中学2年生）：いじめられた経験別(***)



* 無回答を除いた割合